

# 第5回 福岡県グローバル青年の翼

Think Globally, Act Locally

## 2023.報告書



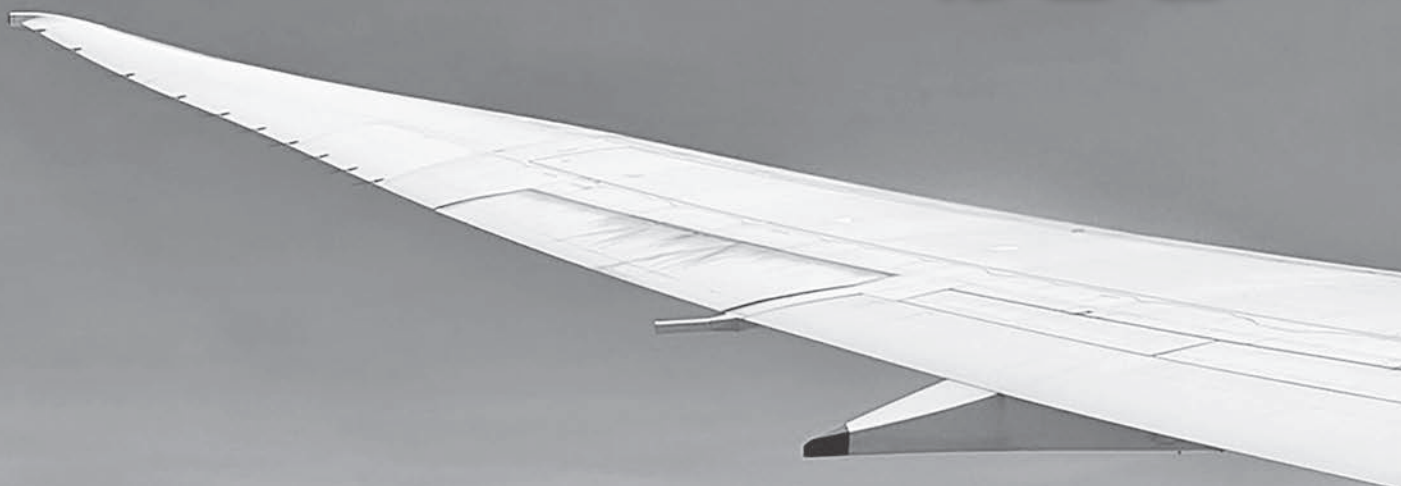




## 第5回

# 福岡県グローバル青年の翼 2023

## 報告書



### Contents

知事あいさつ	2
事業概要	3
団員名簿	4
第1次研修	5
第2次研修(フィールドワーク)	6
第3次研修	8
第4次研修(海外研修)	9
第5次研修	21
副知事表敬訪問	22
団員レポート	23
事務局から一言	31
募集要項	32
SnapShots with Message	33
Special Thanks to	38



### 国際的な視野を持ち、 地域で活躍する人財の育成を目指して

福岡県知事 服部 誠太郎

近年、人口減少・少子高齢化や急速に進むデジタル化、新型コロナのパンデミック、エネルギー価格や原材料価格の高騰など私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。こうした中、世界の動きや社会のニーズを的確にとらえ、新たな発想で先駆的に取り組むことができる人材が求められています。

これからの福岡県、そして日本の発展を考えると、“Think globally, act locally”、国際的な視野を持ち、地域で活躍する「人財」の育成が必要です。

このため県では、躍動するアジアの現状を体感し、現地で活躍する人たちとの交流などを通じて、グローバルな視野を備えた青年リーダーを育成する「福岡県グローバル青年の翼」を実施しています。

今年度は13人の若者たちがカンボジアとシンガポールを訪問し、現地の児童・若者との文化交流をはじめ、現地に進出している国内企業や環境保全活動に取り組む団体の皆さんと意見交換を行うとともに、カンボジアの教員養成大学やシンガポールの日本食レストランなどを訪問し、自ら設定した「人材育成・教育」「観光・食」をテーマに自主研究活動を行いました。

また、海外研修の前には、アジアの現状や福岡県の特徴、途上国に進出している県内企業や、社会課題の解決に向けた考え方について学んだほか、団員自らが企画し、教育支援を行う団体や国内外から観光客を誘致している公益財団法人を訪問するなど、フィールドワークにも取り組みました。

これらの経験は、団員の皆さんにとって貴重な体験であり、かけがえのない財産になったことと思います。これから団員の皆さんが、この「福岡県グローバル青年の翼」で学んだことを糧に、地域の青年リーダーとして活躍されることを、心から期待しています。

県では、県政推進の柱として「次代を担う『人財』の育成」を掲げており、さまざまな体験を通じて能力を磨き、未来に大きく羽ばたこうとする青少年のチャレンジを全力で応援してまいります。

結びに、本事業の実施にあたり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめ、関係の皆さまに心から感謝申し上げます。



## 1 趣旨・目的

県内青年に、世界(アジア)を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

## 2 概要

(1) 団員 13名(内訳:社会人4名、学生9名)

① 第1次研修(通所) 9月9日(土)～10日(日)	県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等
② 第2次研修(フィールドワーク) ①と③の間の任意の日	各班のテーマに関連する県内企業・団体等の視察
③ 第3次研修(通所) 10月28日(土)～29日(日)	訪問国や訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等
④ 第4次研修(海外研修) 11月9日(木)～16日(木)	現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等
訪問先	カンボジア(プノンペン、コンポンチャム、シエムリアップ、バタンバン)・シンガポール
⑤ 第5次研修(宿泊) 12月9日(土)～10日(日)	研修の成果発表・オイスカ研修生との交流等

(3) 参加資格 2023年4月1日現在で、満18歳以上35歳以下の県内居住者(企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者)

(4) 実施主体 福岡県グローバル青年の翼実行委員会(福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、(公社)福岡県青少年育成県民会議、(公財)福岡県国際交流センター、(公財)オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、福岡県青年の会、JETRO(日本貿易振興機構福岡貿易情報センター))

# 第5回 福岡県グローバル青年の翼(2023) — 団員名簿(生活班別)

## 1 班

氏名	所属・職業	役割	テーマ別
たかじょう かずあき 高城 和明	社会人 株式会社共栄ビル・パートナーズ	記録/報告書編集	人材育成・教育
なかしま ゆか 中島 優香	学生 福岡女学院大学	企画	人材育成・教育
はまもと あらた 濱本 新	学生 中村学園大学	サブリーダー	観光・食
ひぐち かえで 樋口 楓	学生 西南学院大学	リーダー	観光・食
よしだ あやの 吉田 彩乃	学生 久留米工業高等専門学校	記録/報告書編集	人材育成・教育
レイク さら レイク 沙羅	学生 九州大学	企画	人材育成・教育
わかざき せいや 若杉 誠也	社会人 株式会社福岡銀行	記録/報告書編集	観光・食

## 2 班

氏名	所属・職業	役割	テーマ別
なかしま かずき 中島 和希	社会人 タカ食品工業株式会社	リーダー	観光・食
ながしま あおい 永島 碧巳	学生 崇城大学	サブリーダー	観光・食
のなか こうだい 野中 弘大	学生 福岡大学	記録/報告書編集	人材育成・教育
ふじもと はるき 藤本 晴貴	学生 西南学院大学	企画	観光・食
もちだ ひなこ 持田 白菜子	学生 福岡大学	記録/報告書編集	人材育成・教育
やまだ こうだい 山田 航大	社会人 株式会社福岡銀行	記録/報告書編集	観光・食



# 初めて出会う仲間と新しい世界を知る時間

於：福岡県千代合同庁舎 9月9日(土)～9月10日(日)

## 1日目

ついに迎えた研修初日。初対面となるメンバーたちと挨拶を交わしていく中で緊張も徐々にほぐれていった。少々の不安とそれ以上に大きな期待を胸にプロジェクトが動き出した。

1日目午前は、田中藍株式会社取締役専務の田中克明氏より「グローバル戦略と生産性について」、OVER THE RAINBOW代表の荒牧明楽氏より「企業におけるダイバーシティ&インクルージョン、アンコンシャスバイアスについて」の講義を受講した。

田中氏からは日本企業が海外へ進出する理由や今後の経済の展望について数値資料など交えて教えていただいた。「ヒト・モノ・カネ」の動きを知り、如何にビジネスチャンスをもものにできるかが今後のカギになることを学んだ。荒牧氏からは多様化が進む社会の中で大切な考え方・モノの見方を学んだ。自らが持つ無意識バイアスに気づいていくことで本当の意味での相互理解につながるという知見を得ることが出来た。

午後からは九州産業大学准教授の豊島茂氏より「九州・福岡の観光動向と展望」、N-SYSTEMS代表取締役社長の長根寿陽氏より「途上国での農業バリューチェーンビジネス」についての講義を受講した。

豊島氏からはコロナ禍前後の海外旅行客数の推移について地域ごとの特徴について学ぶことが出来た。

長根氏からはカンボジアにおける農業の現状や農業ビジネスの可能性について学ぶことが出来た。品質や安定性など課題も多いがその生産プロセスの中でいかにバリューチェーン(価値連鎖)を生み出していけるかが今後どの業界でも重要になってくること

理解できた。

講義後はワークショップの時間となり、2班に分かれて交流企画の検討会を行った。皆で積極的に意見を出し合い有意義な時間を過ごした。長いようで短かった初日の研修はこれにて終了した。

## 2日目

2日目午前は、熊本県立大学総合管理学部教授高埜健氏より「ASEANと日本－信頼できるパートナーシップへ」、ビジネスデザインラボ代表神田橋幸治氏より「社会活動&ビジネスの新潮流－ビジネス視点で社会活動に向き合う－」をテーマにご講義をいただいた。高埜氏よりASEANの成り立ちから現在までの道程および日本との関係性について学んだ。成長著しいASEAN諸国とのつながりは今後の日本に大きな影響を持つためこれからも注目していきたいと感じた。

神田橋氏からは現在の社会課題について、ビジネスとして取り組むことで少子高齢化や環境問題などの諸問題を改善できることを学んだ。身近な問題がビジネスにつながるという視点を持ちニュース・新聞で情報収集を行っていききたい。

午後からはワークショップの時間となり、それぞれの班に分かれて活動した。

2次研修の訪問先やそこでの質問事項など皆で積極的に意見を出し合い、準備を進めていった。

こうして2日間の一次研修はあっという間に終了となった。初めて出会うメンバーとの緊張感もほぐれ、忌憚なく意見を出しあえるようになった。これからの研修にも期待感が膨らむ良い2日間になった。

(文責：高城 和明)

### 講義名・講師

- ・「グローバル戦略と生産性について」…………… 田 中 克 明 氏 田中藍株式会社 取締役専務
- ・「企業におけるダイバーシティ&インクルージョン、アンコンシャス・バイアスについて」…………… 荒 牧 明 楽 氏 OVER THE RAINBOW 代表
- ・「九州および福岡県の観光動向と展望」…………… 豊 島 茂 氏 九州産業大学地域共創学部 准教授
- ・「途上国での農業バリューチェーンビジネスについて」…………… 長 根 寿 陽 氏 株式会社N-SYSTEMS 代表取締役社長
- ・「ASEANと日本－信頼できるパートナーシップへ」…………… 高 埜 健 氏 熊本県立大学総合管理学部 教授
- ・「社会活動&ビジネスの新潮流－ビジネス視点で社会課題と向き合う－」…………… 神田橋 幸 治 氏 ビジネスデザインラボ 代表



カンボジアでの交流企画を検討中の様子



グループワークの発表をする団員



講義の中で考えを述べる団員



講義に集中している団員

〔人材育成・教育チーム〕

# 人材育成・教育班、 国内フィールドワークへゆく!!

福岡市こども見守り支援課 10月6日(金) / 認定NPO法人チャイルドケアセンター 10月10日(火)



私たち「人材育成・教育班」は県内の課題や取り組みを学ぶべく、福岡市役所 こども未来局 こども見守り支援課と認定NPO法人チャイルドケアセンターを訪問し、インタビューを行った。

10月6日に訪れた福岡市こども見守り支援課では、子ども食堂と児童養護施設に関するヒアリングを行い、福岡のこどもの自立支援に関わる課題と現状を伺った。市では子どもの貧困対策として、「生まれた環境に左右されず、子ども一人一人が夢や希望を持てるように」という目的のもと、教育支援、生活支援、保護者に対する就労支援、経済的支援を行っている。そのうち、子どもの食と居場所づくり支援事業と貧困状況にある子どもを支える地域ネットワーク構築事業は、社会福祉協議会に委託し、子ども食堂を実施したい団体への支援を行ったり、学校のソーシャルワーカーと協力し、支援を必要としている子どもに対する支援策の構築に力を入れたりして取り組んでいる。

また、福岡市の児童養護施設の現状として、3箇所設置されている施設において、中高生を中心に約150人の利用者があることを知った。入所している児童の約6割は乳児期に入所していることや、里親家庭制度により児童養護施設以外で生活している児童も多いことも伺った。子どもの自立支援のために「自立支援員」という専門家が在籍し、関係機関と密に連携しながら進学・就職に困らないためのサポートを行なっているそうだ。子ども食堂に関して、福岡市で約50ヶ所の施設があり、福岡市が補助金を出している団体は年々増加している。こども食堂への関心は増えている一方で、3分の2の資金しか補助ができないため継続する人が少ないという課題もあった。そこで、実際にこども食堂を運営している団体に実情を伺うことにした。

10月10日に訪れたのは、認定NPO法人チャイルドケアセンター(以下、チャイケア)。今年で設立23年目を迎えるこちらの団体は、13名の職員がおり、今回は代表理事の大谷氏と理事兼事務局の副島氏に話を伺った。チャイケアでは子育て支援、子どもの健全育成、みんなの居場所、女性の活躍推進事業の4つの活動を行っており、その一環として子ども食堂を運営している。福岡県では300以上の子ども食堂が実施されており、これは小学校区域に一つ程の割合にあたる。福岡県には子ども食堂ネットワークがあり、281団体に209団体がこのネットワークに所属し、その中でもふくおか筑紫こども食堂ネットワークに所属しているのが77団体あるそうだ。

ふくおか筑紫こども食堂を支えるポイントは、食材とのこと。地域の企業から食材を集めるフードドライブや食材配布を行うフードパントリーによって、「食」を通じた子どもの居場所づくりを実現している。生協の輸送インフラを活用することで、こども食堂支援物資を九州・沖縄各地に安く輸送できている。そんなチャイケアが現在注力しているのは子ども食堂とフードバンクの活動だ。特に、食事も調理もできる公民館での子ども食堂の開催に注目している。

こども食堂ネットワークを支えるチャイケア、そして包括的に状況を把握する福岡市へのインタビューを通して、地域全体で子どもたちを支える動き、そしてその動きを支えるための支援が行われていることが見えてきた。

(文責:レイク 沙羅)



福岡市役所 こども未来局 こども見守り支援課へのインタビューの様子

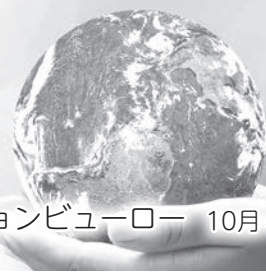


認定NPO法人 チャイルドケアセンターへのインタビューの様子  
活動内容を紹介ビデオを用いながら説明して下さった



# 福岡の魅力を世界へ

公益財団法人 福岡観光コンベンションビューロー 10月4日(水)



観光・食チームは「公益財団法人 福岡観光コンベンションビューロー」を訪問先にした。観光事業部観光事業課の馬場氏・永露氏・森氏からお話を伺う形でフィールドワークを行った。同法人は主に、福岡への観光客・MICEの誘致受け入れなどを通じて、地域経済の活性化、人的交流の促進に貢献することを目的としている。そのため、福岡の食や観光に対する様々な取り組み事例を伺うことができた。

そこでまず挙げられた言葉がMICEであった。MICEとはコロナ後に同法人が特に力を入れている取り組みである。「企業の会議(Meeting)」、「企業等の行う報奨・研修旅行(Incentive Travel)」、「国際機関・団体、学会等が行う国際会議(Convention)」、「展示会・見本市、イベント(Exhibition/Event)」の頭文字から来ており、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの造語である。訪問前まで福岡のイメージといえば食というのが強かった。

もちろん福岡の魅力としては、やはり食であるとお話をいただいた。福岡のグルメを日本だけでなく海外の観光客にも発信するため、英語で説明が書かれたパンフレットなども多くあった。しかしさらに話を伺ってみると、世界各地とダイレクトに繋がるアクセスの良さや、コンパクトに集約された都市機能、あらゆるイベントニーズに対応可能な施設、魅力的な観光資源などと想像した以上に沢山良いところがあった。そういった福岡の魅力をパンフレットやHPなど様々な手段で発信している。

またMICEの課題についても伺った。私は、コロナ明けであり、まだ観光は滞りぎみであるのではと予測していた。しかし、実際は大規模なコンベンション施設や宿泊施設の不足といった課題があるほど人が戻ってきており、ホテル業各社が福岡への新規参入をしているとのことだ。また一方で、オンラインを活用するにあたってのオペレーター不足が課題として挙げられていた。それを踏まえ未来の人材を育成するために学生向けのMICEスクールを開催するといった取り組みがなされているところである。

事業を進める中での参考にしてはいるほかの都市の有無についても伺った。その答えは意外なもので、東京や大阪などの他の都市を直接の参考にしてはいないそうだ。なぜかという他の都市と同じことをやってもそれらの都市を越えることはできないからだ。福岡の特徴を生かし、オンリーワンの企画や誘致を行うことを目標にしているとおっしゃっていた。

今回の企業訪問で福岡の良さを再確認でき、またその利点を生かし行われている事業を知ることができた。企業訪問前に自分たちで課題を探し、ディスカッションをしていた。そのため、実際にお話を伺うことで福岡の企業が世界とどのように繋がっているのか理解を深めることができた。これからの研修でさらに食・観光に対する理解を深めていきたい。

(文責:永島 碧巳)



訪問先の福岡観光コンベンションビューロー

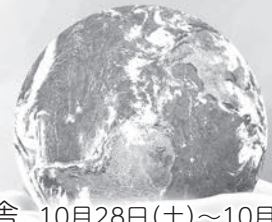


お話を伺っている団員の様子



英語表記の福岡のパンフレット

# 海外研修に向けた最後の準備



於：福岡県千代合同庁舎 10月28日(土)～10月29日(日)

## 1日目

第二次研修のテーマ別フィールドワークを経て、第三次研修が実施された。

まず、JETRO福岡貿易情報センターの宮島氏から日本とシンガポールの関係やシンガポールの教育制度・食文化について講義をしていただいた。シンガポールでは小中学校卒業時点の学力別で進路が決定する「ストリーミング制」という制度がある事を知ることが出来た。またお話の中で肉骨茶（バクテー）というローカルフードが美味しいとオススメして頂きシンガポールに行くのがより楽しみになった。

続いて公益財団法人日本財団の森常務理事、野見山氏より「財団における国際協力とは」というテーマで講義をしていただいた。日本財団という組織の概要やカンボジアでの保健・公衆衛生教育の普及活動を行っていた話を聞くことができた。公益事業に携わる方の活動内容に関する生のお話は臨場感にあふれ、聞くことに夢中になったため、あっという間に時間が過ぎたように感じた。

その後海外研修で訪問するHope of Children の岩田氏から「カンボジアでの生活、支援活動の内容について」というテーマで講義をしていただいた。カンボジアと日本をZoomで繋いで講義が行われ、時折元氣一杯な子供たちの姿がカメラに映りこみ、早く直接交流したいという気持ちが高まった。

1日目の最後は、カンボジアから来日中の農林水産省ボトラ国務次官とCMAC（カンボジア地雷除去センター）のソマティニアディレクターと意見交換する時間があつた。地雷撤去後の土地

を農地に転用し農家を支援するプロジェクトを行っているという貴重な話を聞くことが出来た。

## 2日目

2日目はIKKYU合同会社のAldo Bloise 氏・みずトランスコーポレーションの水谷氏から「海外から見た福岡の魅力と課題」の講義と「英語スピーチ指導」を行っていただいた。福岡は地理的にアジア大陸と近く諸外国からのアクセスと空港が都市部近郊にあることにより日本国内の移動効率が良いという強みがあること、若年層が多い都市であるため、福岡の魅力向上に「Challenge」することで、より魅力的な都市に発展する可能性があることを学ぶことができた。英語スピーチ指導では、Joelle Bloise氏にも加わっていただき、海外研修でのスピーチに備えて、団員の前で一人一人が英語スピーチの発表を行った。私は「自信を持ち堂々と話し、ジェスチャーも交えれば相手の好感を得やすい。」というアドバイスをいただいた。

その後、第2次研修のフィールドワークの成果発表と結団式が行われた。成果発表では教育・人材班と食・観光班それぞれから学びを共有することが出来た。私は食・観光班であるため、福岡が取り組んでいる食・観光を盛上げるための事例発表を行った。

結団式では団員一人一人に団長から団員証が授与された。その後団員から決意表明の言葉を述べた。団員証を手にする時、海外研修が目前に控えているという実感が沸き研修への期待が膨らんだ。

(文責：山田 航大)

### 講義名・講師

・「雑感－シンガポール見聞録」	宮島 彰 氏	JETRO福岡 J-Bridgeコーディネーター
・「日本財団における国際協力とは」	野見山 瞳 氏	(公財)日本財団国際事業部
	森 祐次 氏	(公財)日本財団 常務理事
・「カンボジアでの生活、支援活動の内容について」	岩田 亮子 氏	Hope Of Children
・「海外から見た福岡の魅力とその課題」	Aldo Bloise 氏	IKKYU合同会社 創業者
・「英語スピーチ指導」	Joelle Bloise 氏	IKKYU合同会社 創業者
	水谷 みずほ 氏	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役社長



緊張感のある結団式

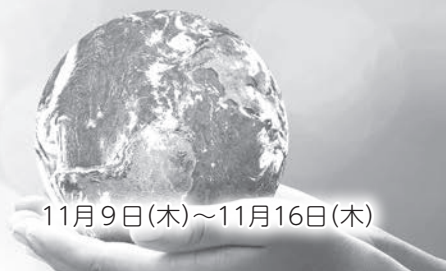


英語スピーチ指導で握手の仕方のアドバイスを受けた(アルド氏、水谷氏)

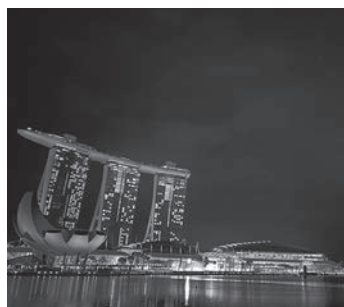


# 第4次研修(海外研修) 日程表

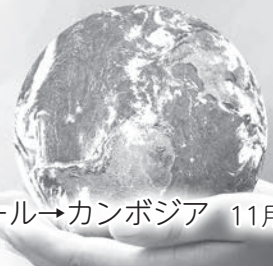
11月9日(木)~11月16日(木)



日程	場所	時刻	内容
DAY 1 11月9日 THU	福岡空港	7:30	出発式
	福岡発	9:45	SQ655
	シンガポール着	15:20	
	シンガポール発	16:30	SQ158
	プノンペン着	17:45	
		19:30	○農林水産省ポトラ国務次官との夕食交流会 プノンペン泊
DAY 2 11月10日 FRI	プノンペン	7:30	○キリングフィールドの視察
	プノンペン発	9:00	バス移動
	コンボンチャム着	12:00	
		13:30	○小学校で植樹体験や文化交流など
		16:00	○(現地NGO)BSDAの視察
		夜	○オイスカ研修センターOBOGとの夕食交流会 コンボンチャム泊
DAY 3 11月11日 SAT	コンボンチャム発	7:00	バス移動
	シェムリアップ着	13:00	
		14:30	○アンコール・ワットの視察 シェムリアップ泊
DAY 4 11月12日 SUN	シェムリアップ発	9:00	バス移動
	バットアンバン着	12:30	
		13:00	○CaféHOCで昼食
		14:00	○児童養護施設Hope Of Childrenで文化交流 バットアンバン泊
DAY 5 11月13日 MON	バットアンバン	9:00	○バットアンバン教員養成大学で文化交流
	バットアンバン発	13:00	バス移動
	シェムリアップ着	15:45	
		16:00	○CMAC平和博物館の視察 シェムリアップ泊
DAY 6 11月14日 TUE	シェムリアップ発	10:40	SQ163
	シンガポール着	14:15	
		16:00	○JETROシンガポールの視察
		19:30	○シンガポール県人会との夕食交流会 シンガポール泊
DAY 7 11月15日 WED	シンガポール	10:00	○シンガポールフィンテックフェスティバルの視察
		12:30	○フィッシュマートさくらやの視察
		15:30	○シンガポール市内の視察 チャイナタウンやガーデンズ・バイ・ザ・ベイなど
			機内泊
DAY 8 11月16日 THU	シンガポール発	1:20	SQ656
	福岡着	8:30	
			解散



## ついに海外研修へ!



福岡空港→シンガポール→カンボジア 11月9日(木)

福岡空港国際線に朝7時15分に集合。第一次研修から第三次研修までを無事に終えて、海外研修へ行く日が来た。団長の力強い挨拶のもと出発式も滞りなく終えて、ついに東南アジアの研修へ!

福岡空港からシンガポールのチャンギ空港までは約6時間のフライト。飛行機では本を読んだり、Netflixを見たりして皆がリラックスして過ごしていた。

到着したチャンギ空港の複合エリアは近未来的で独創的なデザインだった。マリーナベイサンズをデザインした有名な建築家の作品らしい。この日は空港の乗り継ぎのみだったのでシンガポールには滞在できなかったが、シンガポールの雰囲気だけは感じることができた。

次にチャンギ空港からプノンペン空港へ。飛行機はやや遅れて18時頃にプノンペンに到着。ここで団員1名とアドバイザーの荷物が届かないという大トラブル発生!! 研修で最初のトラブルに不安が広がったものの、添乗員や団員の素早い対応によってなんとか問題は解決した。どうやら荷物は違う場所にいったらしい。

トラブルを乗り越えなんとか空港を出て、プノンペンの地に降り立った。夜だったが熱気があり、改めて日本から離れて異国の地に

ついたことを感じる事ができた。まずは空港の外の大仏みたいな像の前で記念写真。そこからバスで夕食会場へ向かった。バスから見る景色は新鮮で、みんなでワクワクしながら外を眺めていた。

夕食は、日本での研修でもお会いしたボトラ国務次官と歓談しながら行われた。パクチーに文句をいっている団員もいたが、料理は美味しく、アンコールビールにととても合うものだった。国務次官にカンボジアの農業の特徴や将来性、課題などについて質問するなど、カンボジアという国についての理解を深める貴重な機会となった。

食事のあとはカンボジアのイオンに行く予定だったが、トラブルもあり時間がなかったためバスの外から眺める程度にとどまった。イオンはカンボジアの物価水準からすると商品の値段はかなり高いものの非常に人気があるらしく、イオンが進出する土地の値段は急騰するらしい。宿泊先は小さくてお洒落なホテル。ホテルに着いた頃には大雨が降っていた。ホテルの窓から外を見ると軒先に犬がいた。犬は「今日は外を歩くのはダメみたいですね」という顔をしていた。

(文責:若杉 誠也)



飛行機からの東南アジア



出発式の様子



ボトラ国務次官との記念写真



最初の晩餐



美味しそうな料理

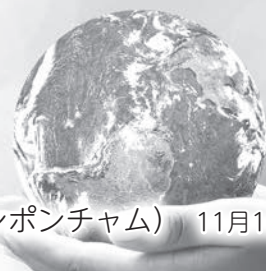


アンコールビール



## 歴史の遺恨を垣間見て

カンボジア／キリングフィールド&amp;移動(プノンペン→コンポンチャム) 11月10日(金)



## キリングフィールド

カンボジア滞在二日目、本格的に海外研修が始まったことを実感するとともに、団員一行はキリングフィールドへ向かった。事前研修において、キリングフィールドではクメール・ルージュによって当時のカンボジア国民が大虐殺され、弔われた場所であるということを知っていた。辺りは田園が広がり、都市部に比べて喧騒もなく、とても静かな場所であったが、特にこの墓地の部分は、まるで時間が止まったかのような異常な静けさを感じた。

当時ここで何が起きていたのか、詳しくガイドに説明いただいた。ここは、元々中国系の墓地であったが、クメール・ルージュに処刑場として利用されるようになったことが始まりとされている。多くの知識人や無関係な国民、特に当時の青年、壮年の男性、女性が大量に、そして無差別に虐殺されたそう。その歴史の傷跡として、現地では当時の過酷な環境を表している図解や、施設が残されていた。

中でも、虐殺に用いられた武器が特に印象的だった。現地に行くまでは、銃を用いて虐殺を行っていたと思っていたが、実際は鉄製の鍬や工具を用いていた。銃を用いると音が外部に漏れ、虐殺が露見してしまうことを避けるためにこのような手段を選んだそう。繰り返し続く痛みを耐え、身近にある死に怯えながら、助

けを求めて無念に亡くなった人たちのことを想像するだけでも胸が痛くなり、それを言葉にできなかった。

非情で残酷な現実からは目を背けたいくなるような福岡空襲と重なる部分があると気付いた。私たちは幼いころから、甚大な被害をもたらした空襲について学んできた。非常に残酷でつらいものだが、この現実を途切れさせてはならないと思い、真剣に取り組んできた。この両方には通ずるものがあると思っている。どちらも私たちの世代は、経験していないことだが、知らないことだからこそ、歴史から目を背けてはならない。私たちはこれを胸に深く刻んでハスを献花した。

## プノンペン→コンポンチャム

視察を終えて、しばらくバスでコンポンチャムへ移動。移動時間が長いこともあり、疲れが出て眠りにつく団員もいれば、疲れながらも研修先で感じたことをまとめている団員もいた。また、途中のトイレ休憩で現地のコンビニを初めて訪れた際には、まるで、お宝を見つけたかのように皆興味津々で、各々時間を過ごしている様子が見受けられた。

(文責:藤本 晴貴)



内戦の傷跡を示す像



ガイドの説明を聞く団員



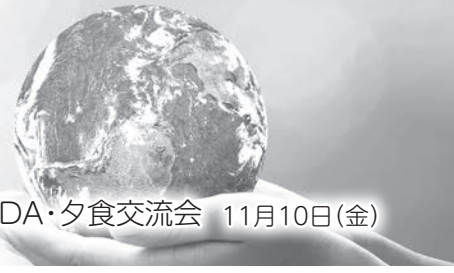
弔いの献花



コンビニで買い物を楽しむ団員

# オイスカの活動、視察を通して

カンボジア／小学校(植樹体験)・BSDA・夕食交流会 11月10日(金)



## 植樹体験

プノンペンからバスでコンボンチャムへ移動し、現地の小学校を訪問した。

到着すると、小学生たちが長い列をつくってお出迎えをしてくれた。熱烈な歓迎に団員たちは思わず笑顔になっていた。

小学校の校長先生へ団員代表から挨拶をした後に、オイスカ事業の「子供の森」計画の体験として、植樹を行った。自然の大切さを肌で感じながら、小学生たちと1本1本丁寧に苗木を植えていった。その後は、子どもたちと写真をとったり、会話をしたりして交流を深めた。交流は、基本的に英語を使って行った。中には英語も話せない子供もいたが、ジェスチャーや表情から気持ちを伝えあうことができた。

最後に日本の文化紹介として団員から、ソーラン節と炭坑節を披露した。国内研修では、小学生たちに日本文化が伝わり、楽しんでもらえるように、全員で練習を重ねてきた。炭坑節では、子供たちも一緒になって踊り、とても楽しんでもらえた。その姿に団員達も元気をもらった。

## BSDAとアプサラダンスの見学

小学校を出発し、道を進むととても狭い道があり、バスでは通ることができなかった。そのため、トゥクトゥクに乗ってオイスカ研修センターOBGのビー氏が代表を務めるNGOのBSDAの視察に向かった。ほとんどの団員が初めてトゥクトゥクに乗ったため、大いに盛り上がっていた。道がぼこぼこしているところでは大きく揺れるため、日本では味わえない体験をすることができた。

BSDAに到着し、ビー氏から団体や施設の説明をしていただいた。BSDAでは特に女性や子どもたちを対象として生活の改善を目的に、職業訓練や教育を行っているとお聞きした。実際に学んでいる教室や、専門的な職業訓練を行う教室など、多くの人が学ぶことができる環境が整っていた。また、別の場所に向かい、クラブ活動として行っている伝統舞踊を披露していただいた。初めて見るアプサラダンスはとても美しく、優雅でカラフルな衣装に身を包み、複雑な手のジェスチャーや表情を使って物語が表現されていた。日本のダンスや衣装とは全く異なった、そのパフォーマンスに圧倒され、カンボジア文化を体感する貴重な経験となった。

## オイスカOBOGとの夕食交流会

夜には、オイスカ研修センターOBOGの方々とSmileRestaurantで夕食交流会を行った。SmileRestaurantも活動現場の一つであるとお聞きし、本当に幅広く職業や就労に関する支援が行われていることを知った。OBOGの方々とは交互に座り英語を通して交流を行った。実際にオイスカ研修センターで何を学んだのか、また、日本に関する質問などを行い、お互いに交流を行った。日本について知っている方や、行ったことがある方と話すとてもうれしく、誇らしい気分になった。言語が異なるためはじめは不安に感じていたが、お互いの言語や共通の言語をもとにコミュニケーションをとることができたため、普段聞くことのできない、現地の声を聞くことができ、貴重な経験となった。

今回のコンボンチャムの行程はオイスカ研修センターOBのワンナ氏にすべて調整いただいた。この場を借りて、改めて感謝を申し上げたい。

(文責:中島 優香・野中 弘大)



植樹体験



子どもたちとの交流の様子



夕食交流会



初めてのトゥクトゥク乗車の様子



アプサラダンス披露



BSDAでの集合写真



# カンボジアの象徴、 アンコールワットを通じて感じたこと

カンボジア／移動(コンポンチャム→シムリアップ) & アンコールワット 11月11日(土)・12日(日)早朝



## コンポンチャムからシムリアップ

研修3日目は早朝から約5時間の長移動を経て、コンポンチャムからシムリアップへ。バスの車窓から見える地平線まで続く広い景色は、日本では決して見られないものだが、とてもどこかで安らぐ景色だった。

## カンボジアの象徴アンコールワット

シムリアップにあるアンコールワットへ向かった。この世界最大の寺院はカンボジアの国旗にも描かれ、まさにこの国の象徴ともいえる。クメール語でアンコールは王都、ワットは寺院のことで、アンコールワットは国都寺院を意味する。12世紀前半、スールヤヴァルマン2世が約30年もかけて建造した、東西1.5km、南北1.3kmの壕に囲まれたこの巨大な寺院はクメール建築の最高傑作と言われている。1992年には世界遺産「アンコールワット遺跡群」として登録された。

## アンコールワットにおいての 日本とカンボジアの繋がり

念願のアンコールワットに到着後、ガイドから本殿へ向かうにはまず唯一の出入り口である西参道を通らなければならないが、この西参道に日本と深い繋がりがあると聞いた。2016年から着工した修復工事では、日本からの遺跡保存の専門家が、当時の工法も駆使し技術指導を行い、私たちが訪れた1週間前に完成式典が行われたとのことだった。式典に参加されていたシハモニ国王も、持続可能な保存や人材育成を推進した日本に感謝されており、この日本とカンボジアの深い絆が、これから両国の象徴の1つになっていくのだと感じた。

## 本殿から神の世界へ

本殿はさらに圧巻で、寺院の全てにおいて細部にまで施された装飾は素晴らしく、特に各回廊の壁に点在するレリーフは芸術的かつ繊細に描かれていたのが印象的だった。

またアンコールワットは東西南北、正確に十字に建築されており、当時高い建築技術があったことも考察できた。

さらに回廊を進み、急勾配な階段を登って入場できる第三回廊と呼ばれる最後の場所は、かつては王だけが入ることを許される場所であった為か、神聖な空気を感じられると同時に、アンコールワット遺跡群の絶景を一望でき、神の世界へ昇っていくよう造られたと言われるのにも納得がいった。

また自由時間ではアンコールワット内の散策や、値切りの文化を体験しながらの買い物もでき、団員たちは楽しんでいった。

## もう1つのアンコールワット

アンコールワットにおいてもっとも幻想的なのが日の出の時間だと伺い、予定にはなかったが、翌日希望者だけで早起きして早朝5時に集合し、再びアンコールワットを訪れた。早朝にも関わらず、沢山の観光客がいることに驚いた。辺りが次第に明るくなると見えてきた、朝日を背景にするアンコールワットとそこから差し込む光はまさに絶景で、前日とは全く別のアンコールワットを見ることができた。また春分の日と秋分の日には、東西南北十字に建築されているが故、蓮の蕾を模して造られた中央仏塔の真後ろから日が昇るそうで、その光景は一層格別であるに違いない。

その後トゥクトゥクに乗って朝の澄んだ空気を感じながら、私たちはアンコールワット遺跡群を後にした。

(文責:中島 和希・濱本 新)



朝陽を纏ったアンコールワット



日中、水面に映るアンコールワット



トゥクトゥクで移動



## HOCの子ども達との関わり

カンボジア／移動(シェムリアップ→バタンバン) &amp; Hope Of Children 11月12日(日)



私達は、カンボジア滞在4日目にシェムリアップからバタンバン州へ移動した。この日は、Hope of Children 略してHOCという孤児院に訪問した。HOCとは、1992年4月2日に設立されたカンボジアの非政府組織であり、家庭内暴力やAIDSにより被害を受けた子ども達、また貧しく教育を受けられない子ども達を主に受け入れている施設だ。HOCでは、子ども達への施設と教育の提供、人身売買からの子ども達の保護、子どもの成長に必要な栄養を考慮した食事の提供、無農薬の野菜・果物・米の生産、自立のためのプロジェクトを行なっている。HOCでは日本人の岩田亮子氏が勤務されている。

私達は、まず自立のためのプロジェクトの1つであるCafé HOCを訪れた。Café HOCとは、施設とは少し離れた所に位置しており、2015年にオープンした無農薬の野菜で作った料理を出すカフェだ。そこで、HOCで育った子ども達が野菜を育て、店で調理し提供している。中に入ってみると、学校の教室を思い出すような木で作られた多くの机と椅子や黄緑色の壁紙に子ども達の写真や料理名が記載されている大きなボードが掛けられてあり、暖かさを感じた。子ども達はボリューム満点のカツカレーを振舞ってくれた。団員は久しぶりの日本食を味わい、自然と笑顔になっていた。

その後私達は、車で施設に向かい、カフェにいなかった子ども達にも会った。子ども達は興味津々で笑顔で歓迎してくれた。会って数分であるにも関わらず、手を繋いでくれたり、笑顔を見せてくれたりと私達の緊張を和らげてくれた。子ども達が流暢な日本語で話す自己紹介が終わると、岩田氏が施設を案内してくださり、いよいよ私たちが国内研修で考えてきた交流企画の時間になった。

まずラジオ体操を紹介した。見様見真似で元気いっぱい踊ってくれる子ども達の無邪気さに感激した。軽く身体を動かし準備ができたところで、外へ移動し綱引きをするグループ、たこ焼きと白玉作りをするグループに分かれた。白熱した綱引きでは、子どもは

もちろん我々大人も一所懸命に綱を引く姿から、国籍や年齢の違いなんて存在しないかのように感じた。

たこ焼きと白玉作りでは、10代の子ども達が数人手伝ってくれた。普段から料理をしている様子で手際がよく、テキパキと料理を進めてくれた。一緒に味見をし、熱すぎて笑いあう時間はとても穏やかで、幸せな時間だと感じた。

カンボジアには、ノムクロロというたこ焼きと似たような食べ物がある。日本文化とカンボジア文化の共通点や相違点を見つけてより文化に対して興味を持ってくれたらいいと思い、たこ焼きと白玉を選んだ。カンボジアの気候の中、外で作る料理は暑さとの戦いで非常に大変なものであった。無事完成させていざ振る舞ってみると、子ども達はまさに止まらない手で食べ始めた。自国のものをあんなに美味しそうに食べてくれる姿に嬉しさが込み上げた。量は少なかったが、私たちにも分けてくれ、子どもながらに譲り合いの精神があるところに感激した。

お腹がいっぱいになりじゃれあって遊び始めたところで、岩田氏からHOCの動画を紹介いただいた。動画では、普段の子ども達の様子が分かりやすくまとめられていた。その後、子ども達から歌のプレゼントがあった。歌ってくれた曲は、竹内まりやさんの「いのちの歌」である。日本人の岩田氏が指導しているだけであって、日本語が上手な子ども達の歌はとても心地よく、素敵なひと時であった。

たくさんの濃密な時間を経ていよいよお別れとなった。今回の交流を通して、幸せは、人それぞれであり、親がいないから、お金がないからといって、不幸せということにはならないことを学んだ。私達は、子ども達から多くの元気と勇気をもらった。これからは、学んだことを基に、どう行動していくことができるかを考える必要がある。日本に戻っても、児童養護施設へのボランティアなど、まず身近なところから関わりを持っていきたい。

(担当:持田 日菜子・吉田 彩乃)



子ども達との交流



仲良く皆でたこ焼き作り



白熱した綱引き



初めてのたこ焼き

# カンボジアの教育の根底を支えていく 学生達との交流

カンボジア／バタンバン教員養成大学 11月13日(月)

かつての内戦の影響で教員の数が圧倒的に少ない現状を変えるために、臨時的・短期的な教員養成を行ってきたカンボジア。その影響により教員自身の知識や授業力が不足した状態で指導をしてきたため、子どもたちの基礎教育の質の低さが社会問題となっていた。政府はこの現状を打破し、充実した学習環境の整備・質の高い教員の育成を目指している。

今回訪問したバタンバン教員養成大学は、日本の公益財団法人である日本財団が支援をしており、実際に現地で活動している法人の教育支援センターキズナとの縁で訪問が実現した。キズナはカンボジア国定の英語教科書の作成やまだまだ普及していない保健衛生教育について指導を行っている。

現地に着いてははじめに、大学のダンスクラブのためにキズナと福岡県の連名で寄贈した鏡の贈呈式が行われた。この大学は芸術教育にも力を入れており、伝統舞踊など練習する学生が多くいたが、練習環境がまだ整備されていない状況にあった。学生や先生方からの鏡に対するお礼の言葉の中で何度も「この鏡のおかげでもっと上手になることが出来ます」というワードが出てきたことが印象に残っている。技術向上に一心に取り組んでいることが伝わってきた。

その後は体育館へ移動し、文化交流が行われた。団員からのパフォーマンスとして日本の伝統舞踊であるソーラン節と炭坑節を披露した。炭坑節では現地の学生も交えて踊った。身振り手振り

動きを伝え、戸惑いながらも一生懸命一緒に踊ってくれていたことが嬉しかった。

学生からは国歌の演奏と伝統舞踊であるアプサラダンスが披露された。アプサラダンスとはきらびやかな衣装を身にまとった女性によるダンスで滑らかな手の動きが特徴的で現代では祝い事の席で披露されているもので、カンボジアに来て2度目の体験となった。今回は我々団員もステージに上がり、その動きを細かく教えていただいた。

これまで体験したことのないような指の動きや立ち方があり大変難しかった。

最後に団員から射的・輪投げ・型抜き・書道の4つのブースを設置し、日本の祭を学生や先生方に体験していただいた。意外にも型抜きが人気で多くの方が悪戦苦闘しながら頑張っていた。

どの交流企画でもみんなの笑顔が強く印象に残っている。お互いに初めて触れる文化でも恐れず積極的に関わってみることで、印象もプラスの方向に昇華されていくのかもしれないと感じた。

交流会後は、皆で昼食をとりながら英語で学生と話した。「子どもたちを導いていけるような先生になりたいんです」、と一人の学生から聞くことができた。その他にも多くの学生が志を高く持って勉学に励んでいることを知った。私も彼らに負けないように日々努力して頑張っていきたい。

(文責:高城 和明)



輪投げコーナーの一コマ



団員と学生の集合写真



型抜きに熱中する学生



みんなと一緒に炭坑節



キズナ・福岡県から鏡の贈呈

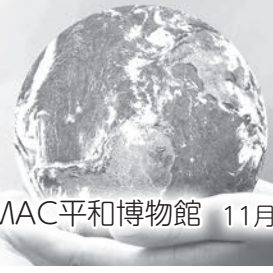


“アプサラダンス”を習う団員達



# ダークツーリズムを体験して

カンボジア／移動(バタンバン→シェムリアップ) & CMAC平和博物館 11月13日(月)



教員養成大学の行程を終え、私たちはシェムリアップにあるCMAC(地雷対策センター)平和博物館を訪問した。ここはCMACの活動や地雷の恐ろしさを伝えるための展示がある博物館である。そもそも、CMACとはカンボジアの人々の平和と安全の移行を達成するための地雷除去を行っている政府組織である。なお本来博物館は閉館の時間だったが、国内研修で意見交換をしたソマティシニアディレクターに調整していただき、訪問が実現した。

バタンバンから博物館まで長いバス移動になったため、団員の中には疲れが出てきている者もいた。しかし疲れを忘れてしまうほど、博物館には心を動かされる展示物が沢山あった。カンボジア政府は現在、「第四次四辺形戦略」に基づき地雷撤去に取り組むことを表明している。この戦略における四辺形は「成長(growth)」、「就業(employment)」、「平等(equity)」、及び「効率(efficiency)」を示している。また、オタワ条約により2025年までに国内の対人地雷をすべて撤去する決まりがあるため、撤去の作業が進められている。しかし、地雷の数がとにかく多いこと、当事者である軍が解体されておりどこに地雷を埋めていたのかわからないことなど、撤去には多くの壁がある。そのため、2025年までにすべての地雷を撤去することは困難とも言われている。

博物館の視察で今も鮮明に覚えているものは、撤去された地雷の生々しさである。また、私が想像していた以上に地雷には多くの種類があった。地雷といえば対人地雷を思い浮かべる方が多い

だろう。ここを訪れるまでは私も、地雷というと手のひらと同じくらいのサイズを思い浮かべていた。しかし実際には車のタイヤのサイズや幅に合わせて埋められたもの、戦車を壊す威力をもつものもあり、その大きさは対人地雷の何倍も大きい。見つけにくいよう、地中に深く埋められ、丸太を介して起爆させる仕組みもあった。これらを視察し、戦争がもたらした負の遺産に衝撃を受け、改めて戦争がどれほど恐ろしいものなのかを痛感した。

さらに博物館を進むと、戦争で使われた武器で作られたオブジェットの展示がされていた。何百もの拳銃を組み合わせてカンボジアの国の形を作っていたり、撤去された武器で「安定」や「信頼」の象徴ともいわれるゾウの模型が展示されていたりした。これらの負の遺産にただただ圧倒させられていた。それらを包み隠さずに伝えようとするカンボジアの方々から、この負の遺産を「二度同じ過ちを繰り返さないための人類の教訓」として捉えているように感じられた。

博物館のガイドの方から何度も日本に対してお礼を述べられた。それは、日本がカンボジアの平和のために支援を沢山しているからである。この博物館も日本の支援により建設されたそうだ。それを聞き、カンボジアを少し身近に感じる事ができ嬉しく思った。そして私にも何ができるか模索してみたい。

(文責:永島 碧巳)



博物館前での集合写真



武器で作られたゾウのオブジェクト



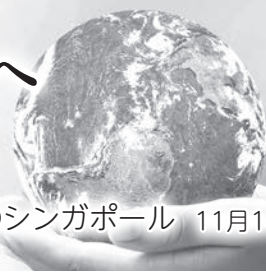
館内を見学している様子



熱心にメモをとる団員



## 東南アジアの中心・シンガポールへ



移動(シムリアップ→シンガポール) &amp; JETROシンガポール 11月14日(火)

## シンガポールへ

海外研修6日目。体調不良者が出たため、団長とアドバイザーと共にカンボジアに残ることになった。3人と泣く泣く別れ、シムリアップを出発して、飛行機でシンガポールへ向かうことになった。完成してからまだ1ヶ月ほどのシムリアップ空港に到着し、ここでお世話になったガイドのパークン氏とはお別れ。真新しい空港内の大きな仏像の前で集合写真を撮った後、各自がカンボジアでの最後の買い物を楽しんでいた。そして機内へ乗り込み、2時間程のフライトでついにシンガポールへ！

入国審査は自動化されており、事前にオンライン申請して受け取ったQRコードをかざし、スタッフに「オヤユビ！」と言われながら指紋をスキャンするとスムーズに入国できた。荷物を受け取ると、ガイドのジャック氏が出迎えてくれた。そして雨が降る中、バスで金融街へ。窓の外にはきれいに整備された街路樹が並び、高いビル群が見え、カンボジアとの発展の違いを早速感じる風景だった。

## JETROシンガポール視察

バスから降りると団員たちは上を見上げて周囲のビルの高さやそのデザインに圧倒されていた。JETROが入るビルの1階で、福岡県バンコク事務所の東副所長と合流後、JETROシンガポール

事務所シニアアナリストの本田氏から、シンガポールを取り巻くマーケットとそのビジネス拠点としての魅力、日本との結びつきについてご説明いただいた。JETRO(日本貿易振興機構)は、国内外のネットワークを活用し、日本企業の海外展開支援や対日投資の促進、調査研究を通じて、日本経済・社会の発展へ貢献している独立行政法人である。

本田氏によると、シンガポールはその人口からマーケットとしては限りがあるが、貿易ハブ、金融ハブとして東南アジアのビジネス拠点となっているそうだ。近年東南アジアは製造拠点からマーケットとして世界に注目されている地域だが、高齢化が進む日本にとっても、若年層の多い東南アジアは将来的にも大きな期待がよせられているとのこと。

団員からの質問で、シンガポールにおける細胞培養肉や植物代替肉の開発に関するものが出た。近年代替タンパク質食品開発への関心が高まる中、シンガポール政府は食料自給率引き上げを目標としており、その積極的な後押しによりフードテック関連のスタートアップが集まっている。新しいビジネスチャンスにフレキシブルで、他の分野においてもスタートアップを受け入れる体制が整っており、日本企業が自動運転の実証実験を行った例もあるそう。シンガポールは社会問題を解決するための拠点でもあるのだと感じた。

(文責:樋口 楓)



3人と一時お別れ



シンガポール金融街



シムリアップ空港で集合写真



本田氏から話を聞く様子

# シンガポール県人会との夕食交流会

シンガポール／夕食交流会 11月14日(火)

JETROシンガポール視察後、シンガポール在住の福岡県出身者の方の集まりである福岡県人会との夕食交流会を実施した。交流会は、ショッピングセンター「オーチャードセントラル」内の日本食レストランで行われた。

今回の夕食交流会には、シンガポールで活躍する日本人学校・幼稚園の方や海運関係企業の方、日本企業のシンガポール駐在の方など様々な仕事に携わる方にご出席頂き、シンガポールでの業務内容や海外での仕事の難しさなどの貴重なお話を聞くことが出来た。また交流会の途中からは、翌日のFintech Festival にブースを出すためにシンガポール出張に来ていたTEAM FUKUOKAの方にも合流頂いた。団員の質問に対して皆様が丁寧な受け答えをしていただき嬉しかったことを覚えている。

夕食交流会の話の中で特に印象に残っていることが1つある。それは「シンガポールという多民族国家で働く際は民族ごとの文化を理解し尊重しなければいけない」という話だ。

シンガポールは人口のおよそ75%近くを中華系が占めているが、マレー系やインド系、他のアジア系・ヨーロッパ系の民族もいる多民族国家だ。そしてそれぞれが独自の言語・宗教・文化を持っている。シンガポールで仕事をする際は異なる民族と共に業務をする可能性がありそれぞれの宗教や文化を尊重しなければならない。例えばマレー系の多くはムスリムであり一緒に食事をする際

はレストランがハラール対応が確認する必要があり、毎日5回の礼拝の時間を確保しなければならない。日本人に囲まれて働いている私にとっては今まで働いてきた中で民族・人種のことについて深く考えたこともなく新鮮であった。今後グローバル化・多様化が進んでいく中で異なるバックグラウンドを持つ方と仕事やプライベートの時間を過ごすことが増えるだろう。人と接する中で配慮の気持ちを忘れてはいけないことを再認識させられる貴重な機会になった。

またこの夕食交流会は、シンガポールでの初めての食事だった。カンボジアでの5日間は衛生面に注意を払いながらひやひやして食事をとらなければならないことが多々あったが、清潔なレストランでの日本食は安心して食べることが出来た。この研修中、生ものは食べられないと思っていたが、ここで食べた刺身は感動する美味しさであった。この日本食レストランには交流会当日も様々な人種の方が食事に来ており、シンガポールでも日本食は受け入れられていることを感じる事が出来た。

交流会の後は福岡県人会の方にご案内いただきシンガポールの定番である観光地「マーライオン」や「マリーナベイサンズ」付近を散策した。高層ビル群が織りなす夜景は迫力があり美しく、団員は夢中になり写真撮影をした。

(文責:山田 航大)



久しぶりの日本食



代表挨拶をする団員



マリーナベイサンズにて



福岡県人会の方との集合写真



# 「Singapore FinTech Festival 2023」

## ～winner-take-all～

シンガポール／フィンテックフェスティバル 11月15日(水)

シンガポール2日目は朝8時にホテルのエントランスに集合。時間に余裕があったため、天気がいち中、ゆったりとホテルの朝食をとることができた。

ホテルを出て、地下鉄にて「Singapore FinTech Festival 2023」へ！このイベントは120ヶ国以上から業界を超えて、10,000の団体、70,000人以上が参加する世界最大規模のFinTechフォーラムとのこと。今年のテーマは「The Applications of AI in Financial Services」で、AIの採用と成長に焦点を当て、この技術が金融サービスでどのように活用されるかを強調するものだった。

ブースの中で特に興味をもったのは、小口取引に特化した支払・送金サービスと世界中の人がプログラムコードなどをオンラインで共有するプラットフォームである。これらのサービスは従来の金融業務を効率的に進化させ、新たなビジネスモデルを生むと説明されていた。あるブースの方にこの業界の特徴と展望を英語で聞いたところ、帰ってきた答えは「winner-take-all」 and 「only time will tell」…つまり勝者総取りの戦いで、誰が勝つかは時のみぞ知るとのこと。この業界の競争の厳しさを物語っていたが、皆が自信満々に見えた。

JAPANチームで出展していたブースでは、FinTech産業やスタートアップの誘致や地元企業の国際展開に焦点を当てていた。福岡は東アジアの多くの主要都市に短時間でアクセスできる立地や人口の数やマーケットの大きさを持っており、改めてポテンシャルの大きさを知ることができた。日本フィンテック協会の鬼頭理事ともお話をさせていただき機会があり、本フェスティバルが世界から注目されていることやFinTech業界の市場規模の大き

さを教えて頂いた。

本イベントはビジネスのためのものであるものの、フェスティバルと名の付く通り、様々な催し物やグッズの配布などあって、FinTechに関する知識がない人でも楽しめるものになっていた。直接行くことができなかったものの各国の軽食や飲み物が楽しめるコーナーや誰でも楽しめるゲームなどがあり、とても賑やかな場所だった。

「Singapore FinTech Festival」は3日間のイベントで、とても大きな会場だったが滞在時間が1時間程度とかなり短く、ごく一部のブースしか回ることができなかったのが心残りだった。ただ、大手グローバル企業からスタートアップまで世界中のフィンテック関連の展示が一同に集結し、金融の未来における多様な視点とアプローチに触れることで新たなインスピレーションを得ることができた。

AIのインパクトは18世紀における産業革命のインパクトと同じように短・中期的には人々の格差を広げることになる可能性が高いようだ。この業界の特徴である「winner-take-all」ではなく公平な分配によってすべての人が平等に暮らせる世界をつくるためにAIを使ってほしいと感じた。

視察を終え、移動のバスから見るシンガポールは街路樹が整備されて綺麗だった。ただ、カンボジアにたくさんいたようなかわいい野良犬たちはもちろんのこと、小動物や虫までいないような気がして、住むには綺麗すぎると感じた。

(文責:若杉 誠也)



会場集合写真



展示ブース



JAPANのブース

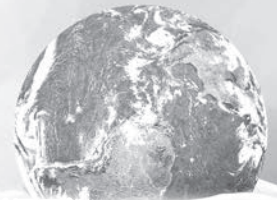


ブースで説明を受ける団員



# 現地の飲食店や名所を視察

シンガポール／フィッシュマートさくらや・市内視察&移動(帰国) 11月15日(水)・16日(木)



## フィッシュマートさくらや

研修も終盤に差し掛かり、団員達はフィンテックフェスティバルの会場からフィッシュマートさくらやへ移動した。到着後、はじめにさくらやで昼食をいただいた。シンガポールでおいしい和食、それも刺身を食べる経験が出来ると思わず、非常に感動した。

その後、CEOの岩下氏から企業の取組みやシンガポールの食に関して説明いただいた。お話を伺って、私たちが食べた料理に用いられていたのはなんと日本から仕入れた魚であり、養殖されたものだということがあった。養殖の魚を使うメリットについても説明があり、一般的に私たちは、自然でとれた魚のほうが良いと解釈してしまう傾向があるところ、実際は養殖のほうが脂の乗りもよく、自然でとれる魚に比べて寄生虫の心配が少ないということだった。一方で、課題も多く存在するようで、本場の和食を知っているお客さんが増えてきたことから、他店との違いを出すためのアレンジに苦労したり、人材の定着率が低く、社員へ店のこだわりが行き届きにくかったりするそうだ。なおこの視察をもって、県パンコク事務所の東副所長とはお別れした。

## シンガポールの名所

海外研修の視察も残すところ最後の行程となった。長かったようであっという間の研修だったと感じる団員もいれば、今までの疲労の蓄積が重くのしかかっている団員も見受けられた。

私たちは、市内の名所を視察するために、チャイナタウンやリト

ルインディアを歩いて街並みを観察したり、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイを訪問したりした。特に、超近未来型植物園であるガーデンズ・バイ・ザ・ベイは印象に残っている。自然と人工物が共生している芸術的なその姿は私たち団員を魅了した。スーパーツリーと呼ばれる特徴的な形をした人工的な木は、日本では見たことがない形状で、美しかった。

研修を締めくくる最後の食事は中華料理店。食卓には美味しいようなカニが並んでいた。振り返ってみれば、日が経つにつれて、所属や年齢を超えた団員間の交流が多く見受けられた。学生はエネルギーを分け与え、社会人はリーダーシップを発揮することで互いに良い刺激をもらっただろう。

## 帰路へ

シンガポールのチャンギ空港にて、体調不良のためカンボジアで離団した団員たちとも合流し、最後は無事に全員で帰国することが出来た。団員の顔には疲れの色が見えた。一週間、研修を全力でやりぬいた証拠だろう。

日本へ入国して、帰国式を行った。団員各々が、団長やアドバイザーたちの話を聞き、達成感を噛み締めていた。特に私は、団長の言葉が心に留まった。「この研修を思い出としてではなく、次への経験の一つだと思ひましょう」。この研修は団員各々の心の中に一生残り続ける財産となるだろう。しかし、ここで歩みを止めず、将来の福岡の発展に役立てるよう一歩ずつ前に進んでいきたい。

(文責:藤本 晴貴)



CEO岩下氏との集合写真！



離団した団員と無事に合流！



ガーデンズバイザベイ！



帰国式にて

# オイスカ研修生との交流・これまでの成果発表

於: オイスカ西日本研修センター 12月9日(土) ~12月10日(日)

1泊2日の第5次研修は、オイスカ西日本研修センターで実施された。オイスカ西日本研修センターは、各国の青年が地域のリーダーとなれるよう農村開発について学ぶ場所であり、現在9名の研修生が在籍している。

**1日目** 研修1日目、私達は、久しぶりの団員との再会に笑みがこぼれた。会話を楽しんでいると、すぐにオリエンテーションが始まった。職員の方々からオイスカや「子どもの森」事業、施設について説明して頂いた。

その後は、いよいよ研修生との交流の時間。私達は、車で研修センターから移動し、研修生達が一生懸命育てたじゃがいもの収穫をお手伝いした。彼らは私達を笑顔で歓迎してくれたため、仲良くなるのに時間はかからなかった。流暢な日本語で彼らが育てている別の畑も紹介してくれ、私達に人参や、みかん、レタスなどをプレゼントしてくれた。

その後、研修センターへ戻り、3カ国の料理を研修生に教えてもらいながら作って、食べた。どのような料理になるのか想像しながら作り、食べる時間は楽しく、各国の食文化を学ぶこともできた。夕べの集いでは、研修生に教えてもらいながら国旗降下を行った。それぞれの研修生が自国の国旗に向かって敬礼する姿は心にくるものがあった。夕べの集いが終わり、お風呂を済ませた後は、研修生たちの各国紹介の時間。皆それぞれ笑顔で紹介してくれたため、彼らが自国を愛していることが伝わってくる時間となった。最後は研修生たちが4曲の伝統舞踊を踊ってくれ、大いに盛り上がり、

1日目は幕を閉じた。

**2日目** 研修2日目、朝は6時から起床して、研修生の方々が普段行っている朝の集いに参加させていただいた。点呼から始まり、国旗掲揚や体操、ジョギングなどを行った。朝早く、眠たい目をこすりながらの参加だったが、1日の始まりを清々しい気持ちで迎えることができた。その後朝食をとり、成果発表会に向けての最終準備を行った。

発表会では、第一次研修から海外研修までを通してテーマごと(観光・食、人材育成・教育)の班に分かれ、成果の発表を行った。テーマごとの課題や発見、学んだことを通しての提案を行い、団員1人1人が研修で気づいたことを発表した。これまでお世話になった関係者の方々や保護者の方にもご観覧していただき、発表後には団長やオイスカ職員の方々から講評をいただいた。

発表を通して、研修の振り返りだけでなく、お互いのテーマから新たな視点を得ることができ、有意義な時間にする事ができた。

その後は、研修後に入会する福岡県青年の会の活動紹介があった。昼食をとり、最後は報告書の編集作業を行った。疲れも見える中、研修最後のワークショップに寂しさを感じていた。

最後は修了式を行い、団員1人1人に修了証が渡された。代表の団員からは今後の福岡でのグローバル人材としての活躍を意気込む決意表明があった。研修を通して成長を感じ、団員全員自信に満ち溢れていた。

(文責:野中 弘大・持田 日菜子)

## 研修内容

- ・オイスカ研修生と交流(農作業の体験、各国の紹介、伝統舞踊の披露)
- ・これまでの研修の成果発表会
- ・報告書の完成に向けた話し合い、編集作業



研修生との交流



修了式の様子



団員による発表



無事に修了証を受け取りました



## 大曲福岡県副知事に激励をいただいた!!

於：福岡県庁舎 8階 12月22日(金)

第5次研修から1週間と少しを過ぎた頃、私たち団員12名(1名は体調不良で当日欠席)は、これまでの研修成果の報告のため、福岡県の大曲副知事を表敬訪問した。これまでお世話になったアドバイザーにも同行いただいた。

表敬訪問にあたり、大曲副知事によるインタビュー記事を拝見した私は、「守りに入らず、新しいことをやっていく」ことや「世の中のニーズや流れをキャッチ」するといったモットーとそれを実行されていく大曲副知事のエピソードを目にし、畏敬の念を抱いた(生まれて20年以上福岡県で育ったにも関わらず副知事の姿勢を存じ上げなかったことを恥じました…。)。当時男女雇用機会均等法施行以前だった時代に女性という枠で自分の可能性を狭められたくない、と公務員の道を選ばれたことや、仕事と家庭・子育ての両立とそのため意思決定など、大曲副知事の「前例にとられない」モットーを体現し組織やシステムを変えていかれたことを知り、お会いすることをとても楽しみにしていた。

表敬訪問では、はじめに団員一人ひとりが自己紹介を兼ねて、研修で得た学びや今後への抱負を簡潔に述べた。

そして、代表の団員2名から研修の内容や成果を、スライドを使用しながら報告した。具体的には、事前研修での学習内容や海外研修全体のスケジュールや各行程の視察概要、そこから得た学び、第5次研修で班ごとに考えた「福岡でどのように学びや気づきを活かせるか」を報告した。シンプルかつ写真がたくさん使われたスライドを用いた発表を、副知事は柔らかい笑顔で頷きながら聞いてくださった。

副知事は、団員に対して今後期待することや研修の労いを述べられ、激励を賜った。副知事は親身に接して下さり、団員の自己紹介をきっかけとした英語に関する話題で盛り上がる場面もあった。優しく温かな副知事の語り口を拝聴し、「私もチャレンジングなことをしたい」と前向きな気持ちになるエネルギーを得た。

今回をもって予定されていた活動は最後を迎えたが、副知事表敬という貴重な機会を通じ、「今後もグローバル青年の翼」で得た繋がりと学びを大事にしてグローバルリーダーとなり得る人になりたい」と決意を固めたのは私だけではないだろう。

(文責：レイク 沙羅)



団員代表による発表



各団員から副知事へ抱負を述べた



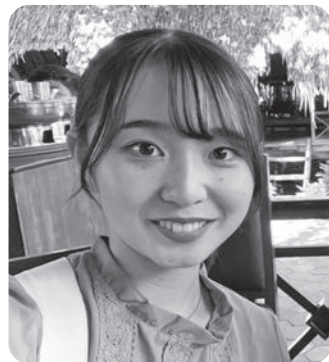
副知事と記念撮影





Grobal Wings  
**1班**

高城 和明 吉田 彩乃  
 中島 優香 レイク 沙羅  
 濱本 新 若杉 誠也  
 樋口 楓



Grobal Wings  
**2班**

中島 和希 藤本 晴貴  
 永島 碧巳 持田 日菜子  
 野中 弘大 山田 航大



## これからも日々勉強

高城 和明

株式会社共栄ビル・パートナーズ



私がこの研修に参加した理由は2点あります。1点目は今年で社会人生活4年目に入り、この研修が自身をより成長させるきっかけになり得ると感じたからです。2点目は大学時代の海外で異文化に触れるという経験が忘れられなかったからです。そこでの経験は非常に興味深く、楽しいものであり、それを再び体感出来ると感じていました。特に今回はカンボジアとシンガポールという同じ東南アジア圏でも印象が異なる2か国に訪問できることも惹かれたポイントでした。

海外研修前の1～3次研修で、訪問する2国について講義を受けてある程度のイメージは出来ていたつもりでしたが、実際に訪問してみるとイメージを超えていきました。

カンボジアでは首都プノンペンと地方との貧富の差が大きく、道路整備の状況や建築物のスケールも全く異なっていました。スクール後の水溜まりが出来た凸凹道をトウトウトと走ったのは良い思い出になりました。シンガポールはカンボジアとは違い、国全体が完成された都市であり、街を歩く人々を見ても多くの外資系企業が拠点を置く多民族国家であることを体感できました。異文化理解に関わらず、どの分野でも言えると思いますが、データのみで学ぶこと以上にその情報をもって自らの目で知ることでより深いところまでその事柄について理解が出来ると実感しました。

今回の研修を通じて最も印象的だったのはカンボジアの小学校での生徒との交流でした。そこでは植樹体験と我々団員による出し物の披露を行いました。植樹体験では12歳と10歳の生徒とグループを組み一緒に活動しましたが、2人とも積極的に英語でコミュニケー

ションを取ってくれて、植樹に慣れない私をリードしてくれました。その後の出し物ではソーラン節と炭坑節の2つの伝統文化を披露しました。炭坑節では子どもたちも巻き込んで一緒に踊る計画を立てていましたが、ちゃんと参加してくれるか不安もありました。しかしその不安は杞憂に終わりました。多くの子どもたちが積極的に参加してくれて、笑顔で踊る姿に感動すら覚えました。全ての行程が終了して帰る際にも、皆が整列して見送りをしてくれたことは今でも鮮明に覚えています。子どもたちのエネルギーに圧倒されながらも元気をもらえる時間となりました。

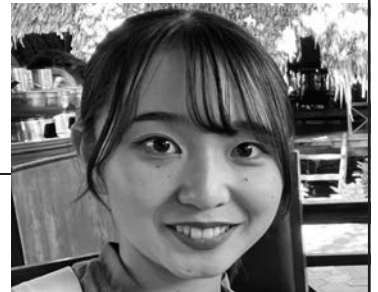
今回の研修を通じて改めて感じたのは英語の重要性です。カンボジアの子どもたち～シンガポールで交流した方のほぼすべてが当然に英語を話すことが出来ました。シンガポールフィンテックフェスティバルでは不慣れた英語で様々なブースで説明を聞こうとチャレンジしましたが、相手が話すことの4割程度しか理解できずとても悔しい思いをしました。英語を話すことが出来ることでどれだけ世界が広がるだろうか。自らの世界を広げるためにも自主学習やこのような国際交流に積極的に参加することで勉強していきたいと思います。

今回の研修を通じて多くの学びを得ることが出来ました。これを一過性のものとせず継続的な学習機会を設けてこれからの生活・仕事につなげていきたいです。

## 言語の壁・現地の大学生と交流して感じたこと

中島 優香

福岡女学院大学



私がこの研修に参加したのは、偏見を持たず、自分の目でカンボジアやシンガポールの現状を知り、スマホやインターネットだけでは、知ることができないことを知りたいと思ったからです。そのためには会話するツールである、コミュニケーションスキルや英語が必要でした。私はこのプログラムに参加すると決意した日から、毎日英単語やリスニングなどを行ってきました。今回のプログラム以前にもロサンゼルスやグアム、シンガポールなどに行ったことがあったため、会話することに不安はありませんでしたが、今回のプログラムでは農業や歴史、金融などの専門用語が多く聞こえ、「こんなにも知らない分野や単語、システムがあるのだな」と気づかされました。

日本から海外に赴き、活躍されている方は常に疑問を持たれており、その課題を解決するためにできることは何か考えられていることが分かりました。そして、自ら行動を起こし、英語を使って意見や考えを伝えているようでした。JETROシンガポールでは、海外のニーズを知ったり、流行を知ったりするためには同じ言語を使い同じ目線で話すことができる、英語の力が重要であるとおっしゃっていました。

このプログラムに参加するまでは、話したいという思いや気持ちが一番大切だと考えていましたが、思いだけではなく、言語化して伝えるための英語が必要であると感じました。

しかし、言語が必要であると感じた時、カンボジアでの研修を振り返ると、子どもたちと一緒に植樹を行ったことで、気づいたことがありました。それは「何とかして伝えようとする」ということです。小学校の子ども

たちは英語が話せず、話せるのはクメール語のみでした。私はクメール語がわからないため、お互いに言語がわからない状況で植樹をしていました。その時、ジェスチャーや表情を使って何とかコミュニケーションを取ろうと試みると、子どもたちも真似してわかりやすいように、目線や合図を使ってコミュニケーションをとってくれました。その行動がとてうれしく感じ、国や言語、文化が異なっても思いは通じ合うのだと感じました。言語の必要性を感じると同時に何かを伝えようと努力することの大切さを学びました。

また、カンボジアで大学生と交流したことは私にとって良い刺激となりました。昼食の際に交流した大学生はアンコールワットのツアーガイドになることが夢であると語っており、家業を継ぐために正しい歴史を学んでいると言っていました。教育制度があまり整っていないといわれるカンボジアであるが、その大学生は多くの観光客と話すことができるように英語学習を行い、日々努力を積み重ねているようでした。国や自分の住んでいる地域関係なく夢をもって努力できることがとても美しく、私もそうしたいと思いました。今回のプログラムでは刺激を受けることが多く、今までの自分の視野の狭さに気づかされました。学んだことを多くの人に伝え、私自身ももっと多くの国について学び、日本や福岡に発信できるよう努力していきたいです。



Global Wings

2023

Group

1

## 食のつながり

濱本 新

中村学園大学



私がこの研修に参加したのは、教科書に書いてあることは本当のことなのか、現実をこの目で見てみたいことと、世界の同い年の子はどんな人たちなんだろうと気になったからです。現在、私は大学生兼専門学生で、将来やりたいことがあり、それに至るまでにいろんなことに挑戦してきました。しかし中身がないまま形だけ終わった感じでしたし、また集団で生活することが多かったので、いざ一人になると何もできないと感じていました。将来、なりたい姿を見つけるために志を持って研修に挑みました。

今回の研修は、1週間という期間でしたが、大変貴重な経験ができました。私の将来やりたいことをできたことや、優しく温かい方々と出会えたため、人は互いに助け合って生活していくのだと感じました。

今回の研修を通して、私は大変運がよく家族や友人に恵まれていることを改めて実感しました。カンボジアにてHOCに行った時や、「子どもの森」の体験で小学校に行った時に、子供たちが置かれた場所で花を咲かせようとする姿に感銘を受けました。

また、HOCでは、「白玉だんご」と「たこ焼き」をおやつ時間に提供し、自分の夢でもあった、出来立ての温かいごはんを食べてもらうことができよかったです。食べるという字は人が良くなると書くので、子供たちと一緒にご飯を作るときや、食べた後に「美味しかった!ありがとう!!」など言われたときはとても嬉しく、「食」で人と人のつながりができてよかったですと思いました。

また、シンガポールにてフィッシュマートSAKURAYAに行った際、海外での和食の良さを伝えるために、従業員教育や、現地でお寿司を食べている外国人の姿が見られたので、日本人として嬉しく、海外で食べる和食がいっそ美味しく感じました。

現在、私は、調理師免許を取るために夜間の専門学校へ行ってます。この免許を生かして、将来はアスリートの栄養指導をしたいと考えています。不器用な私ですが、カンボジアで子供たちのおやつ作りをし、改めて自分はこういうことがしたいんだと実感しました。カンボジアに5日間、シンガポールに2日間いましたが、とても濃い1週間で過ごすことができました。

また、現地で英語を使う機会が多く、積極的に訪問先の方や海外旅行者に話しかけましたが、自分の英語力のなさを実感しました。英語が話せるようになったら楽しいだろうなと感じながら改めて英語の重要さに気づきました。言葉の壁は感じましたが、身振り手振りで伝えることもあり、気持ちが大事なのだと実感しました。ここで学んだことを自分のモノにして、夢に向かっていきます。

Global Wings

2023

Group

1

## 異文化体験から得た新たな視点

樋口 楓

西南学院大学



私がこの研修のことを知ったのは母の勧めによるものですが、正直なところ東南アジアへの興味は特になく、初めは参加しないつもりでした。しかし以前の留学で視野が広がったと感じた経験から、カンボジアやシンガポールという日常とは異なる環境に身を置いて、自分が何を思うのか確かめたい、人生観が変わるかもしれないという気持ちが芽生え、参加を決めました。

研修では、日本での座学も含め、本当に新しい気付きを得ることができました。デジタルネイティブ世代であるからこそなのか、ネットを通じてあらゆる情報が手に入ると無意識に思って生きていましたが、自分で実際に感触をつかみにいくことでしか得られないこともあると身をもって感じました。

その最たるものは、東南アジアに対する私のイメージが塗り替わったことです。東南アジアは発展途上で、日本人の自分からすれば暮らしにくいところというイメージを持っていて、もちろん環境が違うこともあり不便に感じるところはありました。しかし地雷博物館で内戦前の発展していたプノンペンの写真を見て、カンボジアは発展途上というより回復途上なのだと感じ、自分はなにも知らなかったのだと恥ずかしさを覚えました。

またカンボジアでは国旗が祝日でなくても毎日家の前に掲げられており、自国への関心が日本とは異なるのかと考えましたが、あわせて道路わきなどに日本の国旗が描かれているのを何度も目に

し、それがODAの成果だと知ったとき、衝撃を受けたと同時に、自分の住んでいる地域のことを知り、参加する積極性を持てば考え方が変わるのではという学びを得ました。年表や単語としての歴史は知っていてもその実情を知らないままであることに気づき、同様に福岡、日本の歴史や全く別の分野のことも、知ったつもりでいることのほうが多いのかもしれないと自分自身を振り返るきっかけにもなりました。

この研修を通して新しい知識を得られたというより、自分の考えを見つめ直せたと感じています。普段はつい自分に直接関係のあるものばかりに目を向けがちで、考えの拠り所ももちろんそういったものに限定されていましたが、非日常の経験で以前とは捉え方や感じ方が変わったように思います。これから自分が置かれた場所で周りの人や物事とどんな関わり方ができるのか探りながら考えていきます。

## 環境教育と日本の課題について

吉田 彩乃

久留米工業高等専門学校



今回私が福岡県グローバル青年の翼に参加させて頂いたきっかけは、2つあります。1つ目は、以前タイにボランティアに行った経験から、東南アジアの地域ごとの文化比較や宗教の流れ等を調べに行きたいと思っていたからです。2つ目は、福岡県主催の研修ということで、プログラムの中に自己成長を得られる過程が含まれており、研修ならではの学びを得ることができると感じたからです。

このプログラムに参加することで私が期待したことは、フィールドワークを含む研修により自ら情報を得る方法の取得、物事を行う上で目的を明確にし過程から学びを得つつ結果が出た後も次の学びへと繋げる能力の取得です。また、現地での研修では新しい知識や価値観、論理的に問題を思考する能力の向上を期待しました。

実際に海外研修へ行ってみて1番興味を持ったことは、環境に関する教育です。オイスカが環境教育を行っているカンボジアの小学校にて、子どもたちと植樹をする機会がありました。小学校低学年のうちから植樹のやり方を熟知している様子は、これから世の中を背負っていく世代に対する教育の成功例として尊敬の念を覚えました。特に環境問題は、SDGsの一部にあるように世界で課題解決に向かっていくべき目標の一部です。日本の学校教育にと比べると遅れがあるカンボジアですが、環境に対する教育は、日本が一步遅れをとっていると思います。特に日本は、基本的に全ての子どもが教育を受けられる環境下にあり、環境教育を行うにあたりうってつけ

の状況であると考えます。先程述べた通り、環境問題に対する解決は、世界共通の認識であるので環境教育を通して国際的な交流にも繋がるきっかけになると思います。

このことから環境に対する私自身のこれからの行動も見直されました。しっかりとゴミの処理システムがある日本に住んでいるからこそ、日頃のゴミの分別を怠らなければならないと考えられます。また、他国を訪問する際、無闇にゴミが出る物を持っていくべきではないと実感しました。ゴミの問題から使い切りのシャンプー等は持っていないように気をつけていましたが、実際に現地を訪れてみてやはりゴミの分別システムの発展途上を感じました。観光客として訪れた地で余計なゴミを増やすことの罪深さを身をもって感じることができました。

今回の経験を機に自分の行動に責任を持った生活を送ってきたいです。

## 海外研修をきっかけに自分の中に残った問いや疑問と向き合う

レイク 沙羅

九州大学



カンボジア・シンガポールへの海外研修を通して、今でも考え続けている「問い」と出会いました。その中でも3つ例を挙げ、学びと気づきを記したいと思います。

一つ目は、カンボジアの児童養護施設Hope Of Children で子どもたちと接する中で、子どもたちの求めているもの／ことについての疑問です。子どもたちと触れ合う中で、「子どもたちは自分だけに向けられる関心や愛を求めているのでは」と思うようになりました。また、子どもたちからするとせっかく信頼関係を築こうと思った人たちが数時間で去っていく状況であり、別れ際に私たちを見送ってくれている子どもたちを見ながら、「私たちは残酷なことをしているのではないか」という感情が拭えませんでした。

私は、目の前に見つけた課題に目を瞑り見て見ぬふりをせず、一つ一つしっかりと向き合い自分にできることをするよう人になりたいと思っています。その方法の一つとして、HOCで感じた違和感と向き合った結果、私たちの関わったHOCの子どもたちに関心を持っていることを伝える手段として、手紙を送ったり時間や技術の許す限りでオンライン会議ツールを使った交流をしたりして、関わりを持続したいと思っています。

また、私がHOCで感じたことを団員や友達に話していると、「日本にも同じような状況の子どもたちはいる」という意見を多く耳にしました。自分の足の運べる距離や関われる範囲で、「周りの人たちに関心を持っている」というメッセージを発し続けることで、愛の循環の一助を目指すことも、小さいながらも自分に起こせる変化なのかもしれません。

続いて考えているのは、国際協力のあり方についてです。それまで国内で伺っていたODAなどの国際協力は、NGOや政府など「行った側」の視点からしか聞くことがありませんでした。しかし、実際に現地では、ODA等によって作られた成果物を目にし、現地の方のお話を伺う

中で役に立っていることを知りました。その成果物(橋や学校など)が作られる際に現地の人がどう関わったのか(雇用されたのか、修復の仕方を知っているのか)など、現地で役に立ち続けるための持続可能性についてもっと知りたいと思っています。

最後に、短い滞在ながらもGDP世界一を誇っているシンガポールでは、国際社会に働きかけようとした時の日本企業の在り方や、育つ環境で幸せをどう感じるか、考える機会となりました。福岡県人会の皆様との夕食の際に、15~20年前まで有力だった日本企業は、今ではシンガポールで就職先として選ばれにくくなっていることを伺い、今後国際的な視野で存在感をアピールするためにも、日本企業が様々な意味で変わる必要性を感じ、どのような点をどうアップデートしていけたら良いかを考えています。

1泊したシンガポールでは、夜の街を歩くだけでキラキラした電飾が目に入り、逆に息苦しく感じるほどでした。キラキラした街並みに対するワクワク感と共に、キラキラしたお金持ちになることだけが(人生の)成功だと世間に定義されているように感じました。この地で日々の生活を営む人たちはどのような教育を受け、何に満足し、どのようなことに幸せを感じるのか、もっと価値観や人生観を聞きたい、と魅かれました。

このような状況やエピソードは、今まで話には聞いたことがあったものばかりです。しかし人から話を聞いたり本やインターネットで読んだりして知っていたことと、実際に行ってみて自分が感じることは違いました。今回の経験を通して得た気づき、自分の中で芽生えた問いを考え続けたい。また、今回のようにその場に身を置き目にしたことを通しての気づきをこれからも得たいと思います。そうして次の社会や世代につながるアクションをとっていきたくたいです。



## カンボジアとシンガポールを訪れて考える「幸福」について

若杉 誠也

株式会社福岡銀行



国内・海外合わせて約半年にも渡る研修に参加し、貴重な経験をさせていただきました。海外研修先であるカンボジアとシンガポールは共に初めて訪れる国であったため、街の景色や人々の表情、料理など全てが新鮮でした。

カンボジアは、想像していたよりも街が大きく、インフラも整っており、飛躍的に成長していることを肌で感じました。ポルポト政権や内戦などから約40年あまりで大きく回復しているとともに、橋の建設や地雷の撤去など、少なくない部分で日本も貢献していることを知り嬉しく思いました。特に印象に残っているのは、国旗にも用いられ、カンボジアのシンボルとなっているアンコールワットを訪れたことです。800年以上も前にあれほど壮大で洗練された建築が建てられたという事実に技術力の高さや信仰心の強さを感じました。ひょっとすると物質的には豊かであるものの特別な信仰心などを持たない現代人よりも、当時のクメール人のほうが人生に深い意味を見出し、幸福だった可能性もあるのではないかと思います。

シンガポールは日本よりもGDPが高く、発展していることは知っていたものの実際に整備が行き届いている街並みや高層ビル街は圧倒的でした。国の指導層のリーダーシップによって建国からたった数十年であれだけ経済的に発展したとのこと。ただ、現地の方の話や様々な調査によるとシンガポール人の幸福度は決して高くないそうです。それが競争の激しさや生活コストの高さに起因する

のかそれとも別の理由があるのかは分からないものの、経済的な発展や豊かさが国民全体、個人の幸福度に繋がらないかもしれないという事実は日本の将来、そして自分の人生を考えるうえでは無視できないものだと思います。

同じアジアでも全く異なるカンボジアとシンガポールという国に訪問し、2つの国を比較しながら日本という国と自分の立ち位置を考えるきっかけとなりました。日本には少子高齢化や経済の停滞など様々な問題があります。とはいえ、経済・政治的に安定していて、四季があり自然豊かで独自の文化が発達しており改めて自分の環境に感謝するようになりました。

この半年間にわたる研修を通して様々なことを経験しましたが、国の歴史や宗教に関することについて、自分の勉強不足を感じる事が多く、もっと自分で学ぶ姿勢を身につける必要があると感じました。数か月間のこの研修だけでは大きく成長できないと思います。語学力の強化に力を入れ、さまざまな国の歴史や文化などを学び、グローバルな視野を持った真のリーダーになれるように日々を大切にしたいと思います。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださいました関係者の皆様、一緒に研修をしたメンバーにとっても感謝しています。本当にありがとうございました。

## 価値観の変化、これからの自分の礎に

中島 和希

タカ食品工業株式会社



私が勤めているタカ食品工業株式会社では学校給食用ジャムが主力であり、コンビニエンスストアや飲食店で使用されているフルーツソースやピューレなどの製造を手がけています。近年では東南アジア出身の実習生を受け入れ始め、日本人との考え方や仕事のやり方での違いがあるなど日々、感じていたと同時に異文化への理解、新たな視野を広げられないか考えていました。そのような中で本研修を耳にして、自分のステップアップや、国際化が進む社会において貢献できる人材への成長を目標に本研修に参加させて頂きました。

1～3次の事前研修においては東南アジア、福岡を含めた日本の現状など普段、個人では決して聞くことのできない貴重なお話の数々を拝聴して、テレビやネットだけでは入手できない知識や見解を得ることができました。また、実際に福岡で活躍する企業様へフィールドワークに赴くことで、改めて気付かされた福岡の良さ、その反面リアルな課題を考えさせられるものとなりました。3次の英語研修においては、正直学生の頃から逃げていた英語、当然のことながら自分の英語力の低さに愕然として、海外研修でのコミュニケーションに不安を抱いたのを覚えています。

そして臨んだ海外研修。結論から言うと本当に参加して良かったです。カンボジアでのキリングフィールド、地雷博物館への視察。実際の人骨や地雷が展示されており、長崎や広島原爆とはまた違う戦争の悲惨さをリアルに感じました。カンボジアで誤った歴史を繰り返してはならない決意とこれから安全で安心な国を造っていく情熱を受け取ることができました。

オイスカ事業「子どもの森」の植樹体験、児童養護施設Hope of Children、BTEC教員養成大学では

各訪問先での教育の現場に触れることができましたが、一番印象に残っているのが皆、笑顔で元気一杯だったということです。皆、温かく迎え入れてくれました。言葉は分からずともお互い言いたいこと、伝えたいことは分かり合っていたと思います。

海外研修前の不安は杞憂でした。逆にこれを機にもっと英語や東南アジア諸国の言語を勉強してみようかなと思うきっかけになり、帰国してからは英語と社内でベトナム人技能実習生がいるため、ベトナム語を隙間時間にアプリで勉強しています。

シンガポールにおいては日本に近い衣食住の水準がありますが、少子高齢化など日本と共通する問題、都市発展故の課題があり、日本も見習っていかなければならない政策が幾つもありました。

今回の研修では今まで自分が勝手に、海外の抱えていたイメージや価値観が大きく変わりました。百聞は一見にしかずというがまさにその通りで、本当に貴重でかけがえのない体験をすることができました。この研修で学んだことを礎に今後、職場や福岡に貢献できる自分への第一歩として踏み出していこうと思います。

## また訪れたいです、カンボジア!

永島 碧巳

崇城大学



この研修に応募した理由は、自分にもっと自信をつけたいと思ったからです。大学に入学し、以前より幅広い年齢層と関わることが増えました。なぜなら、私の通う崇城大学の操縦学専攻に通うクラスメイトは、様々なバックグラウンドを持った人達が多く、中には他大学を卒業後に社会経験を経て再度この大学に入学した人もいます。そういった環境で過ごしていくうちに、周りとの経験量の違い、また社会に対する自分の知識不足を痛感していました。そして少し自分に自信を無くしていた気がします。そんな時に見つけたのが、この「グローバル青年の翼」です。

これまで海外に行ったことがなく、今回の海外研修前は「期待」よりも「不安」が大きかったことを思い出しました。しかし今ではそんな感情を抱いていたことも忘れるほど、とても有意義な時間を過ごすことができました。カンボジアでは現地の小学生との植樹体験や、児童養護施設の「Hope of Children(HOC)」での交流、BTEC教員養成大学で行われた交流会などを通し、沢山の方との出会いがありました。そのひとつひとつの出会いがかけがえのない奇跡であると感じました。

また植樹体験をした小学校では、最後に日本の文化を伝えるため、「ソーラン節」と「炭坑節」を披露しました。「炭坑節」は現地の子供たちも参加してくれて大変盛り上がりました。「HOC」では綱引き大会をした後に、日本の「たこ焼き」と「白玉団子」を一緒に作り振舞いました。この2つの施設を訪問して気づいた点があります。それは子供たちの人懐っこさの違いです。どちらの施設の子供たちも沢山コミュニケー

ションをとってくれましたが、特にHOCの子供たちはずっと手を繋いでいたり、特定の人にくっついていたり人懐っこさが見えました。このような違いが見えた理由は、オイスカは現地の学校であり、親と暮らしている子供が多いのに対して、HOCは親のいない子供や、家族と離れて暮らす子供たちであるからです。そのためHOCの子供たちは、私たちに母性を求めているように見えました。帰るときにはHOCの子供たちが竹内まりやさんの「いのちの歌」を日本語で歌ってくれるという素敵なプレゼントを貰い、お別れをするのが悲しくなりました。

そしてシンガポールの「FINTECH FESTIVAL」において出展者とのやり取りは英語で行いました。しかし英語でのやり取りが難しく、悔しい思いが残りました。そこから英語に対して熱意が出たと思います。帰国してから英語に触れる機会を増やしています。それまで英語に対するモチベーションが低かった私だが、あの悔しさを忘れまいと日々勉強しています。

この研修を終えて、またカンボジアに行きたいと思いました。現地で頑張る方達の力になりたいと感じました。今の私はこの経験を広めることしかできませんが、これから経験を積み自分にできることを探していきたいと思いました。

## 様々な交流から見えた新たな視点

野中 弘大

福岡大学



私は現在大学4年生であり、来年から社会人として、会社の中でグローバルに活躍できる人材になることを目指しています。

そのため、今回の研修を通じて海外に対する自身の価値観を広げたいと考えていました。

ただの海外旅行で気づくような受け身な文化的価値観ではなく、歴史や現状を学んだ上で国際的な視点を身につけられるこの研修に魅力を感じ、参加しました。

今回カンボジアのような発展途上の国に行くのは初めてであり、すべてがとても刺激的でした。バスで移動しながら交互に見える、大きな街並みと殺風景な景色は今まさに成長している国であることを感じ取れました。また、シンガポールを訪れた際には街並みの壮大さと綺麗さに圧倒されました。JETROに訪問した際の説明で、シンガポールは「人のビジネス」が多様な国の人が情報を求めて集結すると話を聞き、建国60年足らずで急成長を遂げてきたシンガポールは東南アジアのまさに中心都市であり、新たな情報が行きかう場所であることを実感したと同時に、洗練されすぎている街並みに少し不気味さも感じました。しかし、他民族を受け入れているという点では、多様性を受け入れている国であり、日本ももっと多様性が重視される街でなければグローバルな社会の実現は難しいなと感じました。

今回の研修では特に、現地の人との交流で気づかされるのがたくさんありました。

しかし、現地での交流に向けて私はいかに英語で会話ができるの

かを意識して臨みました。

小学校で子どもたちと一緒に植樹をしたり、炭坑節と一緒に踊ったりする中で英語を話さなくても、笑顔で接してくれる彼らと時間をともにし、勇気をもらえたことから、言語以外のコミュニケーションの大切さに気づかされました。

しかし、コミュニケーションをとっている中で、私の宗教のことや、日本のことについて尋ねられる場面がありました。それに対して私は返答に困り、うまく返すことができませんでした。彼らが私に興味を持ってくれたことに対して、英語で伝えられないもどかしさとまだまだ日本のことについても無知なことがたくさんあることを痛感し、これからの自分の学習に対する意識について考えさせられました。

この研修でたくさんのことを経験しました。国際的な視点を身につけることは、同時に自国の現状と自身の課題を改めて問題視できる機会だということを感じ、これからの自分の生き方の指標になりました。さらに、研修の中で歳の違った団員の着目している視点に常に驚かされ、感心させられるばかりで、常に刺激をもらっていました。今回の研修で人との出会いから学べることは大きな財産になることも実感し、自分の今後の生き方を考えさせられる貴重な機会となりました。



## 発見と理解

藤本 晴貴

西南学院大学



私は、この研修が始まる前は非常に不安でした。何かに秀でているわけでもなく、年齢だけを積み重ね続けてきた人生だったからです。そんな臆病な私ですが、目標があります。具体的な職業こそ決まっていないうが、海外と福岡を繋ぎ、互いの国の人が笑顔で往来できるようにしたいです。目標の実現のために、海外の人と通じるために必要なこと、またなぜ臆病なのか、自分と異なる文化や人々に触れることによって、本当の理由を知ることが出来るのではないかと考え、今回の研修に参加しました。

今回、私にとって初めての海外渡航となり、非常に胸が高鳴ったことを今でも鮮明に覚えています。目に映る光景の細部まで、今まで生きてきて感じたことのないものがありました。辺りには、自分たちと異なる言語を話している人が大半で、自分たちこそが、「外国人」であるという事実は非常に奇妙で面白い経験でした。

しかし、実際に海外に出てみて、変わらないこともあると感じました。それは、同じ「人」であるという事実です。私は彼らと完璧に言語が通じなければ、意思疎通は不可能であると考え、畏怖していました。しかし、この研修を通して親交を深めた人たちは皆、互いに拙い言語力であっても、同じように笑いあったり、楽しんだりすることが出来ました。特にカンボジアのバタンバン教員養成大学で学んでいる生徒と目標について話し合うことで、お互い良い刺激を受けました。この気づきを得ることができただけでも、将来自分にとって非常に大きなものになると考えています。

海外の方との親交で得たものも非常に大きいですが、私には、他にも大きく得たものがあります。それは自分についての理解です。今まで気づいていませんでしたが、団員同士の交流は、それを見つめ直す絶好の機会でした。海外研修では毎日の集団行動で、だんだんと親交を深めていきました。

ある日、思い切って夕食時に自分の研修の参加理由と、悩みについて相談しました。自分の素性について話を重ね、それぞれの豊かな考えを聞いていくうちに、自分が臆病である理由について、細部まで理解することが出来ました。この研修に参加している方は皆、自分なりの芯を持っており、それぞれがよく考え、活発に動いています。元々海外の人たちと交流を重ねていけば、理由が見えてくると思っていましたが、それだけはなかったです。今思えば、この研修に参加している人達との交流も、大きな意味を含んでいたのだと振り返って気づきました。

今回この学び多き研修に参加させていただいたことに感謝するとともに、さらにこれから邁進していきたいです。

## 子供達の笑顔を守るために

持田 日菜子

福岡大学



私が今回のプログラムに参加した理由は、アジアを実際に訪れ、現状を理解し、力になりたいという思いがあったからです。私は今年語学を学ぶために2ヶ月間フィリピンに行きました。フィリピンについての知識はなかったため、そこで見たフィリピンの状況は私の予想を超えていました。それは、道路に設置されたゴミ山からくる悪臭、路上で寝泊まりしている人々などです。特に驚いたことは、育児放棄をされた子供たちが物乞いをしているということです。私は、「子供達は社会の犠牲者なのだ」と知り、他のアジア圏の子供達の現状も知りたいと思うようになりました。

研修で学びたいと思ったことは、子供達の教育や環境についてです。カンボジアは約50年前に内戦を経験し、多くの知識人が殺されてしまったため、教師が不足しています。また、親がいない子供や、親と離れて暮らしている子供も大勢います。そのような状況の中で、子供達はどのように教育を受けているのか、どのように暮らしているのか知りたいと思いました。

研修で学んだことは、まだまだ十分な教育が受けられる、育てられる環境と人材が行き届いていないということです。実際、HOCで勤務されている日本人の岩田亮子氏は幅広い年齢層の子供も達、数十人を1人で見ていました。2人の大人が1人の子供を育てるだけで相当の体力と時間を要するため、岩田氏が持つ子供達への熱い気持ちは心に響くものがありました。

私は、この研修を通して、子供達の力になりたいと思いました。もちろん、親がいないから、貧しいからと偏見で相手の気持ちを決めつけることは出来ません。一人ひとりの子ども達に寄り添うことで、子ども達が素敵な大人へと成長し、充実した生活を送ることができるような力になりたいです。HOCを訪れた際、子供たちがお礼として歌ってくれた竹内まりあさんの「いのちの歌」は決して忘れることはありません。

個人的な出来事として、カンボジアでの研修中、新型コロナウイルスに感染し、2日間入院をしました。私自身、これまで入院経験がなかったため不安でいっぱいでしたが、医師の方々にサポートして頂き、無事に退院することが出来ました。また、海外保険に加入していたため、金銭面の負担がありませんでした。

国内の事前研修では、カンボジアの人々の保健に対する知識が不足していることも学びました。人々の大事な命を救うためにも、教員養成大学で保健について学習し、広げていくことの重要性も改めて感じる研修となりました。

## 海外研修を終えて

山田 航大

株式会社福岡銀行



私は日々の業務の中でお客様と話す際、「海外進出」や「外国人技能実習生」などのグローバル化に関する言葉を耳にすることが増え、海外の現況についてより理解を深めたいと考え本研修に参加しました。

実際にカンボジア・シンガポールを訪れ感じたことは、両国ともに自分の想像以上に発展していたという事です。訪問以前は都市部といってもカンボジアに高層ビルはまばらにある程度だと思っていましたが首都プノンペンでは見上げるような高層ビルが建ち並び、建設中のビルも多く、想像以上に経済が力強いなと思いました。また市内にはレクサスやボルシェといった、いわゆる高級車が多く走っていることに驚きました。こういった情報や感覚は実際に見て肌で感じてみないと得ることができないなと感じました。インターネットで調べたことや人から聞いたことだけで物事を判断することなく実際に自分の目で見て感じたことも含めて判断することを心掛けたいと思いました。

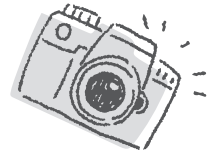
シンガポールでは多様性の在り方について理解を深めることができました。シンガポールは中華系やインド系・マレー系で構成される多民族国家です。町を歩けば肌の色や様々な民族衣装を目にし多様性があることを実感できました。福岡県人会の皆様との夕食会において、キリスト教・イスラム教・ヒンズー教にまつわる祝日がそれぞれある事を知りました。また学校では祝日の前に絵本などでそれ

ぞれの宗教・文化に触れ一緒に祝うそうです。この話を聞き多様性を成立させている

のは相手を知ろうとする姿勢を持つこと、お互いの同じ部分、あるいは違う部分を尊重することだと思いました。私たちが普段過ごす日本の社会の中でも多様な価値観を持つ人が共に過ごしているため、シンガポールで感じたことを忘れないようにしたいです。

また私がこの研修で一番心に残っていることは「Hope of Children」の子供たちが竹内まりやさんの「いのちの歌」を歌ってくれたことです。日本から遠く離れたカンボジアの子供たちが上手な日本語で歌ってくれて、練習をたくさんしたのだろうなと思いを打たれました。また歌詞にある「めぐり会えた奇跡はどんな宝石よりも大切な宝物」というフレーズを聞き、この研修で多くの方とお会いしお話しさせて頂いたことはとても幸せなことだったのだなと改めて思いました。今後も今回の研修でお会いした方のご縁を大切に、学んだことを日々の仕事・生活に活かしていきます。

# Global Wings of Fukuoka Youth





## 今後の成長と活躍を期待します

団長（福岡県青少年育成課長）左藤 秀樹



令和5年度「福岡県グローバル青年の翼」は、9月上旬の第1次研修から始まり、テーマ別の第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月9日から16日までの7泊8日の日程で、カンボジアとシンガポールの2か国を訪問しました。その後、12月に1泊2日の5次研修と副知事への表敬訪問を実施して、すべてのカリキュラムを終えました。

初めに訪問したカンボジアは、都市部で経済発展が進んでいますが、農村部との地域格差が大きい国です。まず、事前の国内研修でもお世話になったカンボジア王国農林水産省ポトラ國務次官やオイスカ西日本研修センターの卒業生で環境保全活動などに取り組む皆さんと交流を深め、同国の強みや日本との違いなどについて意見交換をしました。世界的に有名な観光地を視察する時間では、実際に自分たちの目で、その規模の大きさ、高度な建築技術や美しいレリーフを見ながら宗教や歴史を学ぶことができました。さらに現地の歴史を学ぶため、刑場跡や地雷の博物館も視察して、貴重な展示を見ながら改めて平和の尊さを感じました。文化交流の機会としては、小学校、児童養護施設や教員養成大学を訪問して、教育に関して学ぶだけでなく、互いの国の伝統文化を紹介したり、将来の夢などを話し合ったりする中で、異文化の壁を越えた友好関係を築くことができました。

次に訪問したシンガポールは、多くの民族・文化・宗教が共生する、アジア有数の経済大国です。街並みに圧倒されながら訪問した行政法人や日本食レストランの視察を通して、現地の生活環境や事業戦略の考え方などについて知見を深めました。また、世界の企業が集まる祭典に参加し、最先端のテクノロジーに触れ、英語の重要性を痛感する機会にもなりました。現地で活躍する日本の皆さんとの交流も行い、ざっくばらんに海外でのビジネスや生活の話聞き、強い刺激を受けました。カンボジアに比べて短い日数の中、非常に充実した研修になりました。

事前の国内研修で、福岡県に縁があり、さまざまな舞台で活躍する方々の講義から、訪問国の歴史や文化などをじっくり学び、テーマに沿った自主研究を行っていたからこそ、海外研修の学びが深まったのではないのでしょうか。

カンボジアとシンガポールは特徴の異なる国ですが、地域のために活動する現地の方たちと交流し、刺激を受け、多くのことを経験する貴重な機会であったと思います。現地で体調不良者が発生したことで、私は残念ながらシンガポールの行程から離団しましたが、現地関係者の素早い対応のおかげで最終日に皆さんと合流して、全員で帰国することができました。

最後に、約4カ月に及ぶ研修を成し遂げたことは、団員の皆さんにとって大きな自信になるとともに、一緒に頑張った仲間との絆は、今後の人生にとってかけがえのない財産になることと思います。この研修で得た経験を活かし、それぞれの地域や職場で活躍されることを心から期待しています。

## 4年ぶりとなった研修を無事に終えて

福岡県青少年育成課 梯 裕星



「福岡県グローバル青年の翼」は、国内や海外での研修を通じて、国際的な視野を備え、職場や団体等の中核となって地域で活躍できる人材を育成する事業です。

この事業は、前身の事業から長い歴史を持ちますが、新型コロナウイルスの影響でここ数年は中止していました。4年ぶりの開催となった今年度は、団員13人が全5回の研修に参加しました。

団員のために貴重な講義をしていただいた講師の皆さま、フィールドワークにご協力をいただいた皆さま、視察を快く引き受けていただいた皆さま、そして、この事業を様々な形でご支援いただいた皆さま、本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。是非、今後の団員の成長を温かく見守っていただければ幸いです。

そして、団員の皆さん、4カ月にも及ぶ長い研修でしたが、本当にお疲れさまでした。今回は4年ぶりの開催であること、海外研修の訪問国が前回から変わったことから、事務局が不慣れで至らない点多かったかと思いますが、最後までしっかりと研修に取り組んでもらい、非常に嬉しく思います。

国内研修では、様々な講義やグループワークを実施しました。社会課題解決のために活動する方やグローバルな視点を持ってビジネスに取り組まれている方、アジアの文化や産業、歴史に精通している方たちなどからお話を聞いたり、意見交換をしたりする中で、その情熱や想いに触れ、様々なことを自分で考えるきっかけになったのではないかと思います。

また、日常生活ではあまり交流する機会がない方々とチームを組んだグループワークにおいて、異なる立場や年齢の方たちとお互いに励まし合ったり刺激し合ったりして友情を育んだことは、貴重な財産になったと思います。

海外研修では、連日早朝から夜まで多くの視察や交流会を実施して、過密なスケジュールでしたが、皆さんはお互いに声をかけあいながら、果敢に挑んでくれました。皆さん一人ひとりがそれぞれの感性で、現地の歴史、異なる文化や価値観に直接触れ、色々なことを学んだことで、一回りも二回りも成長するとともに自分自身を見つめ直す機会になったのではないのでしょうか。

私自身、今回のような濃密なスケジュールで海外を訪問することは初めてであり、団員の皆さんと同じように、毎日が驚きや感動の連続でした。日本とは違う価値観や新しい経験から多くのことを感じ、今年度で社会人7年目になる私も、様々なことにアンテナを張りながら、これからも所属の中で頑張っていかなければならないと決意を固くしました。

さらに、視察中に熱心にメモを書く姿や積極的に質問をする姿、将来の夢を語る姿や空いた時間に本音で意見交換をする姿など、海外研修中に皆さんの熱意を感じる場面が多くあり、事務局として皆さんを支えることができ本当に良かったと終始感じていました。国内研修で練習に励んでいたソーラン節などの出し物を、現地の皆さんの前で精一杯披露する姿は、特に印象に残っています。

団員の皆さん、是非これからも視野を広く、何事にも好奇心を持ってチャレンジし続けてください。そして、この研修で深めた絆を大切にしてください！

# 第5回福岡県グローバル青年の翼 Global Wings of Fukuoka Youth 2023

## 募 集 要 項

### 1. 目 的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や団体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

### 2. 主 催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会（以下「実行委員会」という。）

### 3. 事業内容

(1) 募集人員 19名

(2) 全体の研修スケジュール（予定）

- ① 第1次研修（宿泊又は通所）…9月9日（土）～10日（日）  
県内企業の海外展開、国際協力活動・県の施策等についての講義等
- ② 第2次研修（フィールドワーク）…①と③の間の任意の日  
海外訪問先に関連する県内企業・団体等への視察
- ③ 第3次研修（宿泊又は通所）…10月28日（土）～29日（日）  
訪問国及び訪問先に関する講義・英語スピーチ指導
- ④ 第4次研修（海外研修）…11月9日（木）～16日（木）8日間  
現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等
- ⑤ 第5次研修（宿泊）兼報告会…12月9日（土）～10日（日）  
海外研修レビュー・報告会等  
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

(3) 海外研修

日 時 2023年11月9日（木）～16日（木）8日間（予定）  
訪問先 カンボジア（プノンペン、アンコールワットなど）、シンガポール  
※募集締切直前にシンガポールを追加

### 4. 募 集

(1) 募集人員 19名

(2) 募集締切 2023年6月23日（金）

(3) 応募資格 ①～④のすべてに該当する者

- ① 県内居住者で、2023年4月1日現在、満18歳～35歳の者
- ② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍することを目指す者
- ③ 過去2年間（2021年度以降）のうちに国・地方公共団体等の公的経費（一部助成を含む）によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。
- ④ その他  
・研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできる健康状態であるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者  
・第1次研修から第5次研修及び報告書作成までの全てのプログラムに参加できる者

### 5. 応募方法

下記の書類をとりそろえ、県簡易申請システムを用い、申し込むこと。  
なお、書面で郵送又は持参する際には「12. 問い合わせ先」記載の所在地に送付すること。

#### 【必要書類】

- ① 参加申込…様式1又は県簡易申請による
- ② 勤務先所属長の承諾書（ただし被雇用者のみ）…様式2
- ③ 作文（様式自由）  
応募動機と併せ、この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること。  
・ワードファイルにおいて、1,200字程度  
・縦A4判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること（タイトルは自由）

#### 【応募期限】

電子申請 6月23日（金）23時59分  
郵送又は持参 6月23日（金）16時必着

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/globalwing-portal.html>

### 6. 団員候補者の選考、決定

(1) 団員候補者の選考

選考	選考種目	配点	内容
第1次選考	作文	30	申込時の作文の内容を総合的に判断
第2次選考	集団面接	50	積極性、協調性について判断
	総合評価	25	集団面接から総合的に判断

実行委員会において、第1次選考を行い、結果を7月上旬までに本人に通知する。

第1次選考の合格者については、7月9日（日）（予定）に第2次選考（面接）を実施し、8月初旬までに内定者を決定し本人に通知する。

(2) 団員の決定

団員の決定は、第3次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第3次研修終了時に行う。  
※不適当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

### 7. 選考結果の開示

選考結果については、口頭により開示の依頼をすることができる。（下記参照）

対象選考	開示請求できる人	開示内容	開示期間	開示場所
第1次選考	受考者	順位、総合得点	選考結果通知日の翌日から3か月間	福岡県庁6階 青少年育成課（実行委員会事務局）
第2次選考				

なお、電話、はがき、メール等による請求は不可につき、受考者本人であることを証明する書類（学生証、運転免許証、旅券、マイナンバーカード（個人番号カード）、健康保険の被保険者証等）を持参の上、直接開示場所に来ること。

### 8. 経費・損害等の負担

(1) 次に掲げる経費については個人負担とする。

負担金	その他の個人負担経費
120,000円 (学生 100,000円)	県内研修に係る経費（交通費、食事代、宿泊費等）、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、海外研修に係る経費（県内旅費、一部の食事代・交通費、燃油サーチャージ、海外渡航に際し必須となる予防接種ないし検査費用等）

- (2) 負担金は、10月に実施予定の第3次研修前までに納入するものとし、納入後は原則として返金しない。なお、負担金納入の有無に関わらず、団員が自己の都合により辞退した場合に生じるキャンセル料等については、本人が全額を負担するものとする。
- (3) 研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。
- (4) 海外渡航に際し必須となる予防接種ないし検査等がある際には、原則対応すること。なお、対応しなかった際に生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

### 9. 団員資格の取消し

- (1) 団員として不適当と認められる者（研修の無断欠席、研修活動を妨害する者など）については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取り消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。なお、帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
- (2) 団員資格を取り消した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

### 10. 事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に会の活動に関わっていくことが求められるほか、県からの事後アンケート等に対し真摯に対応すること。（研修後、毎年アンケートを実施する）

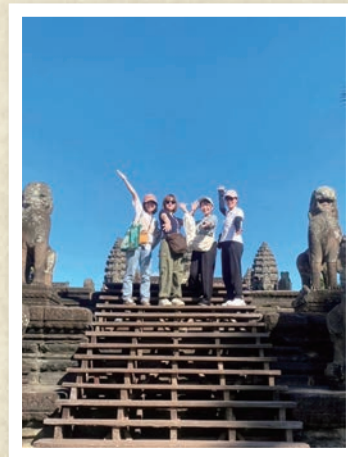
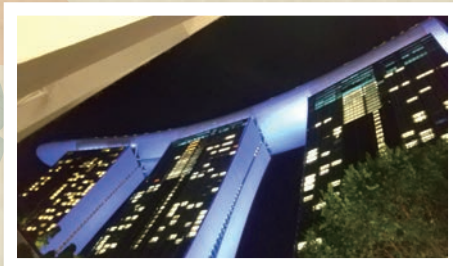
### 11. その他

本事業において撮影した写真・ビデオ等を本事業の広報、又は報告書の作成に利用することがある。

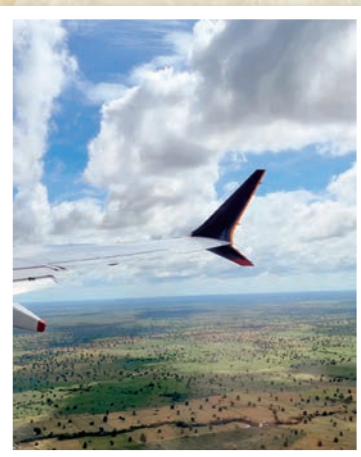
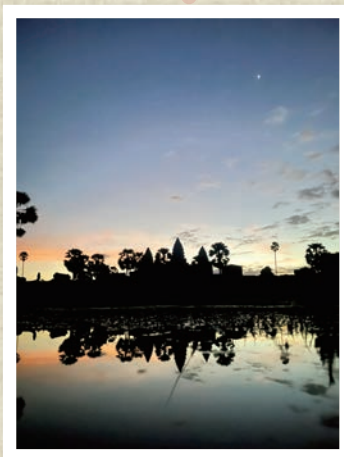
### 12. 問い合わせ先（応募先）

福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局  
〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号  
福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局青少年育成課内  
電話 092-643-3402





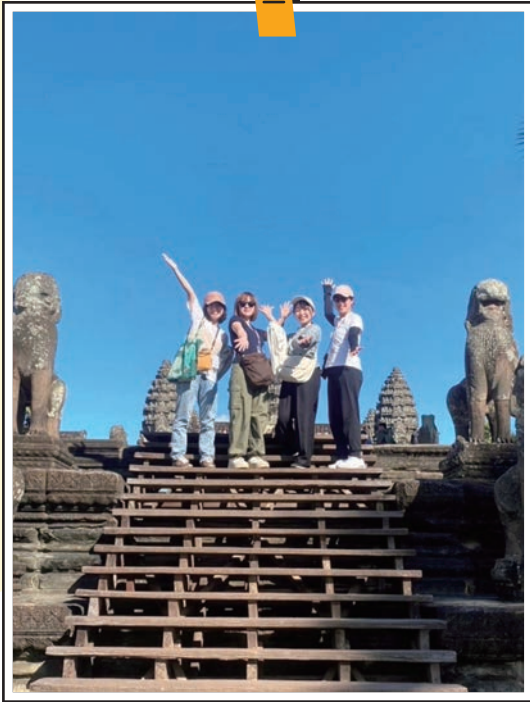
# Snapshots with Message





1  
班

# Snapshots with Message



## 中島 優香 Profile P24

とても良い天気でよい眺めを見ました。  
初のアンコールワットでしたが、最高の思い出となりました。  
真っ青な空と歴史的なアンコールワットの眺めはとてきれいでした。



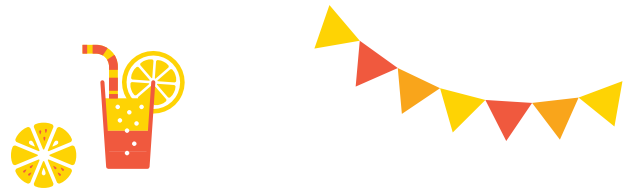
## 樋口 楓 Profile P25

シンガポールの地下鉄車内の禁止事項の表示。飲食で罰金が科されることを知らず、うっかり水を飲みそうに…!  
Singapore is a fine country を実感した瞬間でした。



## レイク 沙羅 Profile P26

キリングフィールドにて。  
ガイドさんが「カンボジアの義務教育ではポルポト政権のことを教えていない。だから今の若者には知らない人もいる」と仰っていて衝撃でした。







若杉 誠也 Profile P27

アンコールワットからの帰り道にあったぶりっとしたお尻の像。古代のクメール人はお尻好きだったらしい。



濱本 新 Profile P25

カンボジアの朝のアンコールワット！  
うすぐらいアンコールワットがだんだん明るくなる感じがとても幻想的でした。



高城 和明 Profile P24

カンボジアの露店で見つけた液体が入ったペットボトル。中身はなんとガソリンらしいがその品質は果たして…



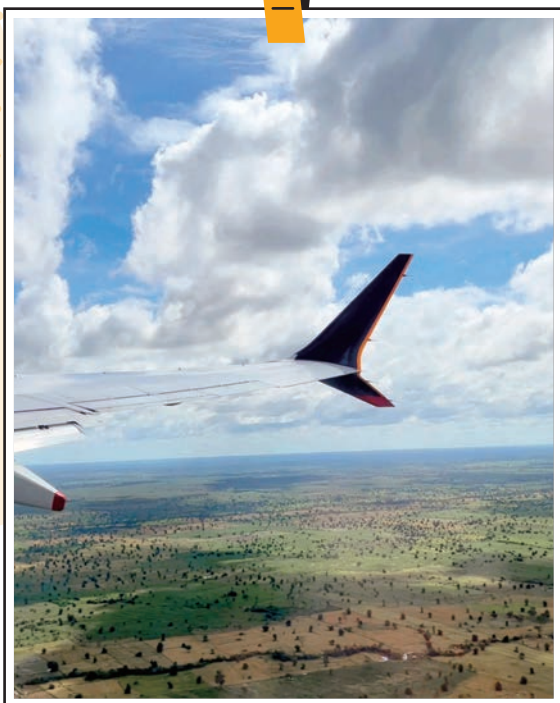
吉田 彩乃 Profile P26

プール付きのホテルが最高でしたー！



2  
班

# Snapshots with Message



## 永島 碧巳 Profile P28

カンボジア上空の写真！  
ずーっと草原!地平線がくっきり見えます。  
ちなみにシンガポール上空からは沢山の船が浮かんで  
いるのが見えました！



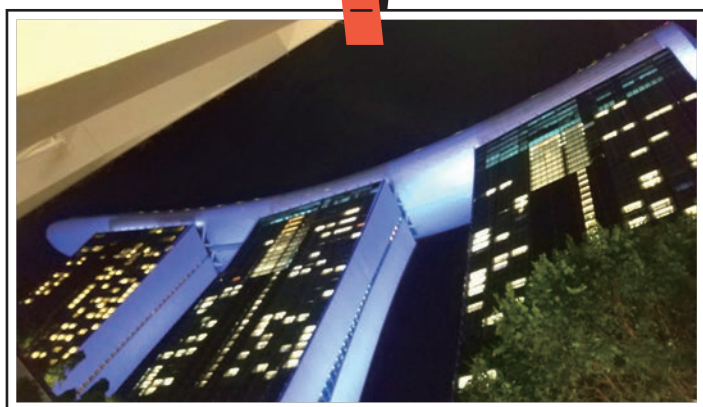
## 野中 弘大 Profile P28

カンボジアでのナイトマーケットでの一枚！  
なんとも刺激的な場所でした。



## 永島 碧巳 Profile P28

カンボジア上空の写真！  
ずーっと草原!地平線がくっきり見えます。  
ちなみにシンガポール上空からは沢山の船が浮かんで  
いるのが見えました！



## 中島 和希 Profile P27

シンガポール初の統合型リゾートマリーナベイサンズを  
真下から。横からの写真は何度も見たことあるが、下  
から見ても迫力が凄かった。  
次は屋上のインフィニティプールに行くぞ！







### 藤本 晴貴 Profile P29

HOC カフェの皆さんが作ってくださったカツカレー！  
久々の日本食に皆大盛り上がり！  
もう一度食べたいな～！



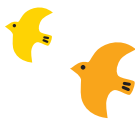
### 山田 航大 Profile P30

小学校での植樹体験中の1枚。  
いつか大きく育った樹を見に行きたいな～



### 持田 日菜子 Profile P29

カンボジアでトゥクトゥク  
風が気持ちよくてずっと乗っていたかったな♪



# Special Thanks to

## 国内研修の講義・視察などでお世話になった皆様

研修	氏名	所属
第1次研修	田中 克明 様	田中藍株式会社 取締役 専務
	荒牧 明楽 様	OVER THE RAINBOW 代表
	豊島 茂 様	九州産業大学地域共創学部 准教授
	長根 寿陽 様	株式会社N-SYSTEMS 代表取締役社長
	高埜 健 様	熊本県立大学総合管理学部 教授
	神田橋幸治 様	ビジネスデザインラボ 代表
第2次研修	公益財団法人 福岡観光コンベンションビューローのみなさま	
	福岡市こども見守り支援課のみなさま	
	認定NPO法人チャイルドケアセンターのみなさま	
第3次研修	宮島 彰 様	JETRO福岡 J-Bridgeコーディネーター
	森 祐次 様	公益財団法人 日本財団 常務理事
	野見山 瞳 様	公益財団法人 日本財団国際事業部
	岩田 亮子 様	Hope Of Children
	キー・ボトラ 様	カンボジア農林水産省 国務次官
	プラク・ソマティ 様	カンボジア地雷対策センター シニアディレクター
	水谷みずほ 様	合同会社みずトランスコーポレーション 代表取締役社長
	Aldo Bloise 様	IKKYU合同会社 創業者
	Joelle Bloise 様	IKKYU合同会社 創業者
第5次研修	廣瀬 兼明 様	公益財団法人 オイスカ西日本研修センター 所長
	満川 善雄 様	公益財団法人 オイスカ西日本研修センター 西日本支部主任
	公益財団法人 オイスカ西日本研修センターのみなさま	

## 海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆様

氏名	所属
長根 寿陽 様	株式会社N-SYSTEMS 代表取締役社長
キー・ボトラ 様	カンボジア農林水産省 国務次官
ワンナ 様	オイスカ西日本研修センターOB(カンボジア)
オイスカ西日本研修センターOBOG(カンボジア)のみなさま	
岩田 亮子 様	Hope Of Children
高田 忠典 様	教育支援センターキズナ 代表理事
バタンバン教員養成大学の教員、学生のみなさま	
CMAC平和博物館のみなさま	
福岡県バンコク事務所のみなさま	
本田智津絵 様	JETROシンガポール シニアアナリスト
中村 英人 様	シンガポール福岡県人会 事務局長
佐々木治彦 様	西日本シティ銀行シンガポール事務所 所長
シンガポールの夕食交流会にご参加いただきましたみなさま	
フィンテックフェスティバルで対応いただきましたみなさま	
岩下 順二 様	FISH MART SAKURAYA CEO

福岡県グローバル青年の翼にご協力をいただきました全てのみなさま、

**団員一同、心より厚く、熱く御礼申し上げます。**









編集 福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局  
 〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号  
 福岡県人づくり・県民生活部私学振興・青年育成局青少年育成課内  
 Tel 092-643-3402

発行 2024年3月  
 印刷 株式会社 博多印刷

